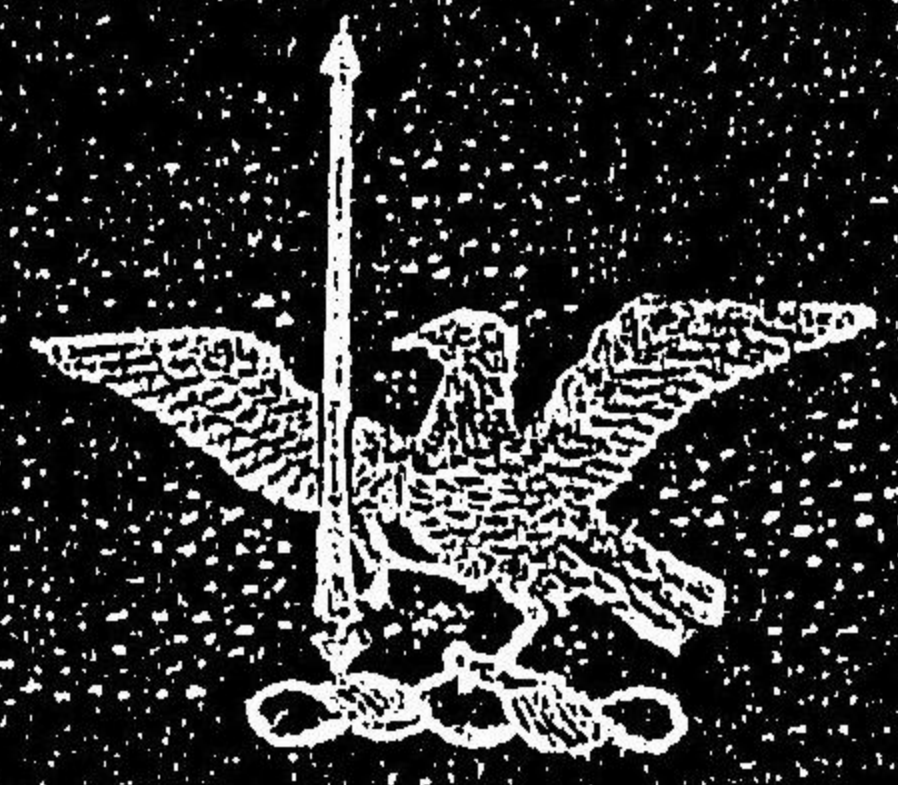
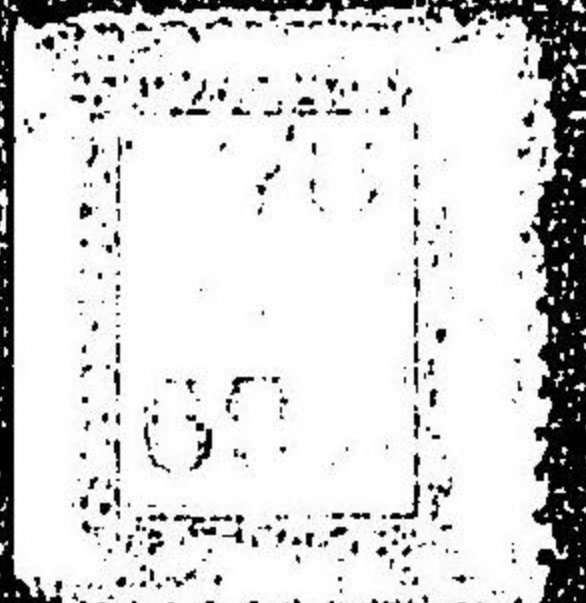
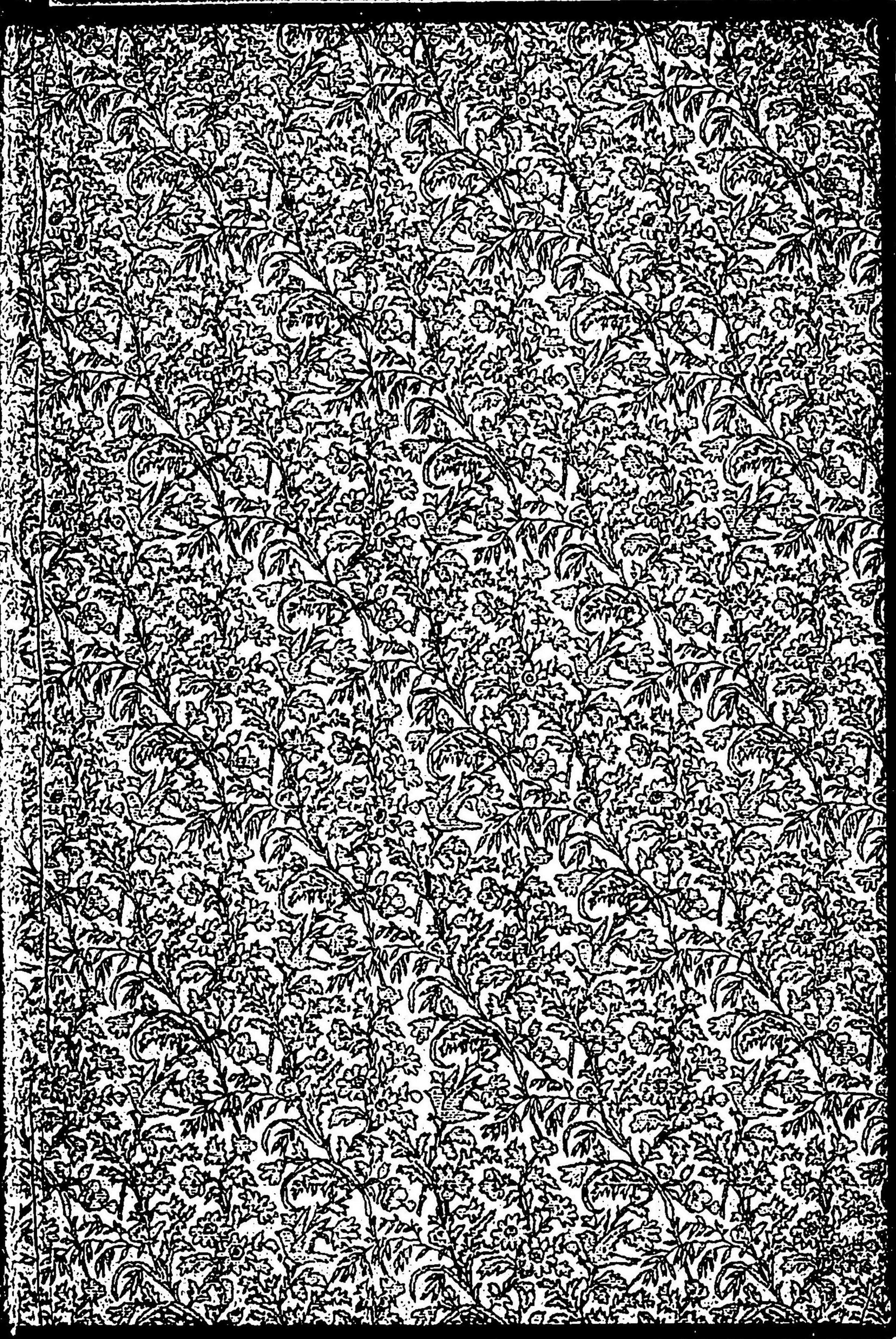
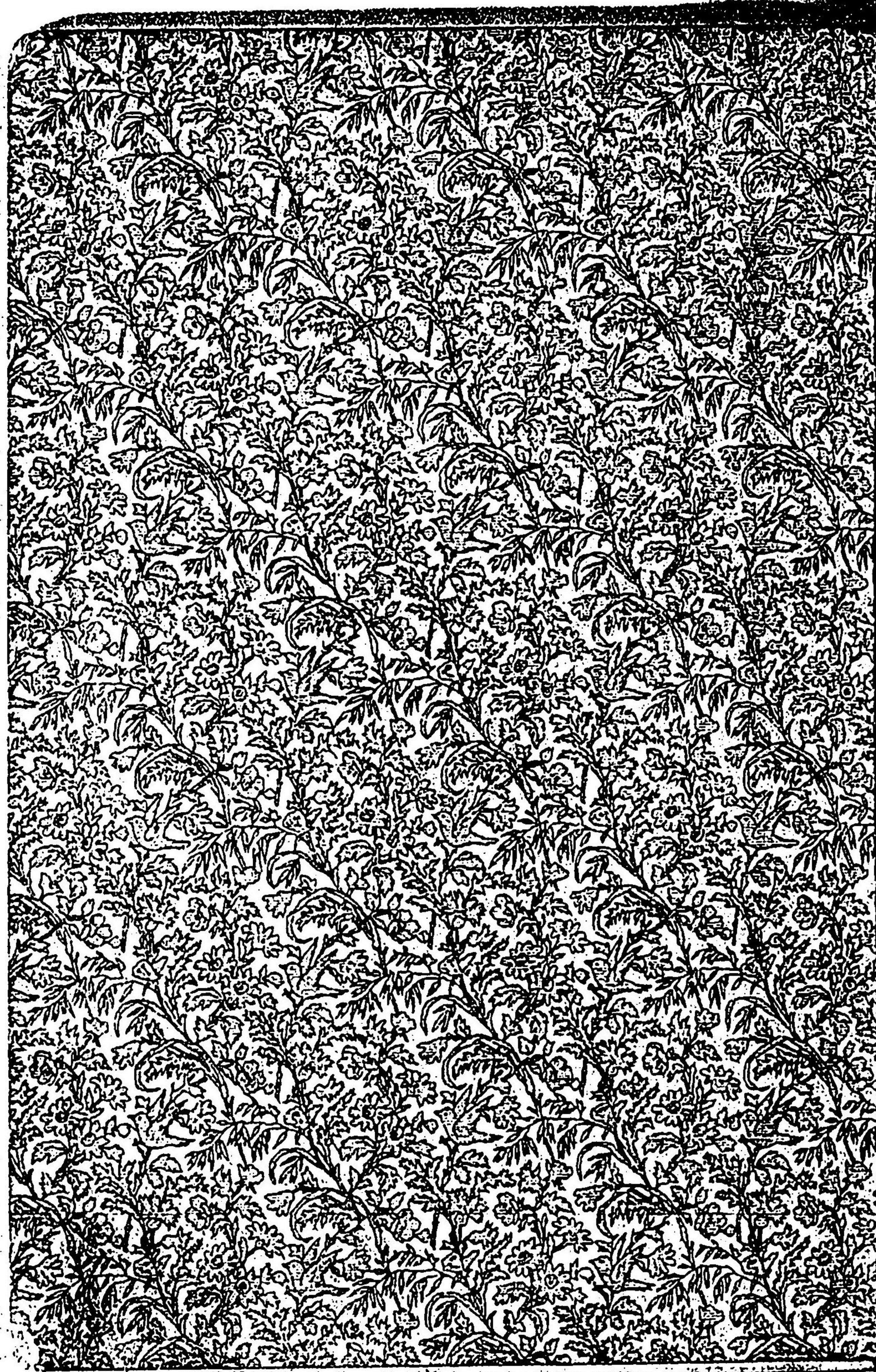


nov. 1900. S. Gaffney



戸澤姑射
浅野馮靈
共譯





此劇は沙翁が喜劇中の尤も愛すべく尤も愉快なる
 ことに信ぜらるゝ所のものなり。然れども
 此劇を讀む者の豫め心得置くべきことは、沙翁の喜劇
 尾純粹の喜劇的部分より成立たざる
 ことなり。即ち沙翁の喜劇は大抵悲喜混滑劇にして、只
 だ其結末が必ずめでたしを以て終るを通則とす。
 されば人物の白の如きも必ずしも喜劇的ならず、或は
 崇高なることあり、或は悲壯なることあり、或は莊嚴な
 ることあり、或は凄愴なることあり、大概毎編此の如き

序

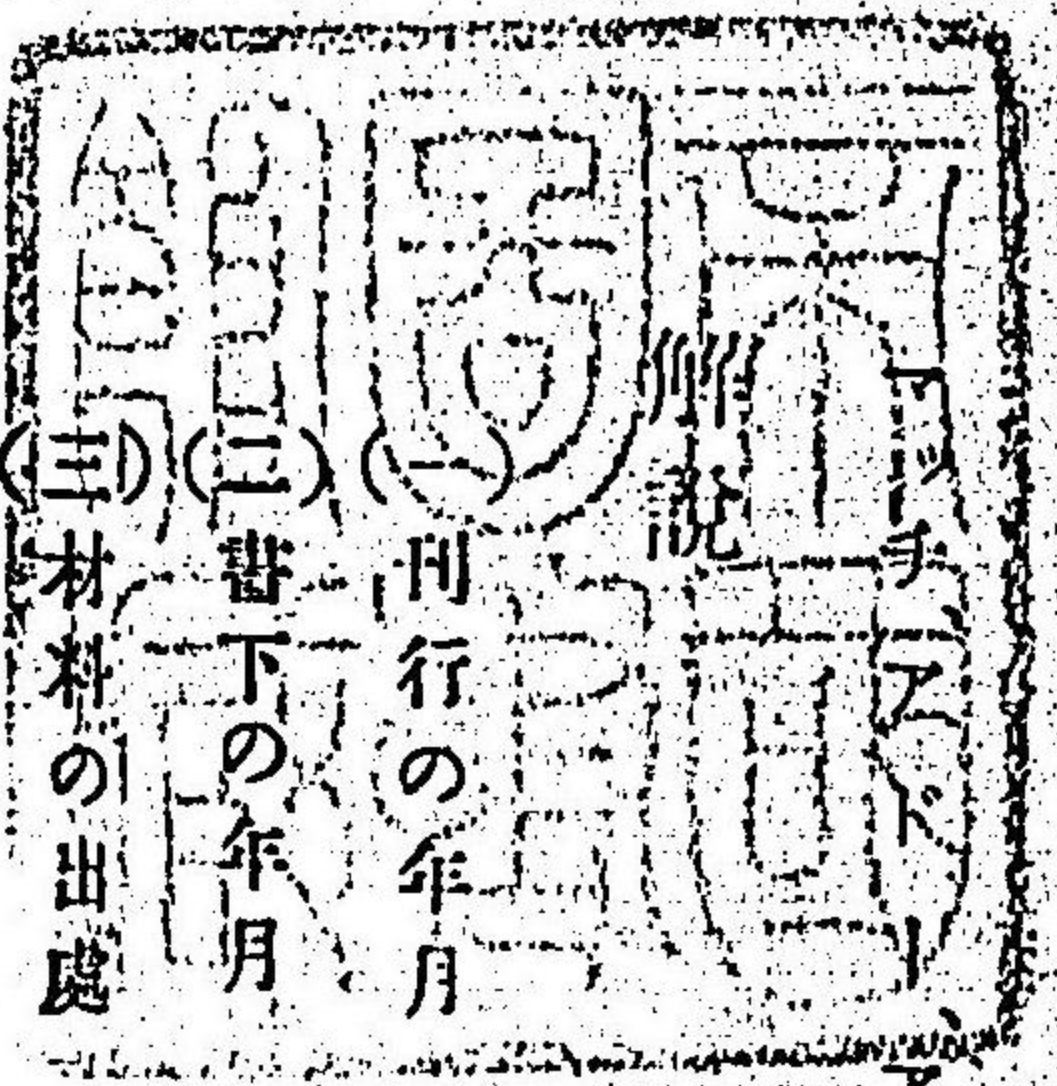
明治
 40 4 23
 内本

悲劇的の最高調の嚴肅なる白を含まざることなきに似たり。加之其尤も喜劇的の部分といへども、比較的嚴肅にして、一字一句讀者の頤を解き、腹を撚らしむるが如き、可笑的刺激性の分子は甚だ尠少なり。此點に於て沙翁の喜劇は讀者の所謂喜劇なるものに對する豫想と、或は相背反する所なきか、是れ譯者の少しく懸念せらるゝ所なり。然らば沙翁の喜劇は何を以て特色と爲すかとの疑問起らむ。譯者は答へて曰く、優雅にして溫藉なる感情と、醇美なる滑稽趣味とが混淆融和せられ、而して一般に趣味の豊富なる事是なりと。されば喜劇と

聞きて早合點にも只管頤を解き、腹筋を撚らんと覺悟にて來る者は、或は沙翁の喜劇に於て失望落膽の恨を抱かむ。然れども優雅なる感情の美を味ひ、豐饒なる趣味の醇を吸はむと欲するの讀者は、永へに熟讀の勞を悔ゆることなからむ。只だ拙譯原文の妙趣を損じ、韻文散文の錯綜に依つて生ずる所の意味以外の意味の如き、之を遺漏なく傳ふること能はざるは、譯者の吳々も遺憾に堪へざる所なり。

明治四十年一月

姑射



アバウト、ナッシング(から騒ぎ)

- (一) 刊行の年月
- (二) 書下の年月
- (三) 材料の出處
- (四) 梗概
- (五) 喜劇及び登場人物の性格に就て

(一) 刊行の年月

此喜劇の最初の刊行は、一六〇〇年發行のクォート版是也而して此劇に

マッチ、アード、アバウト、ナッシング解説

は、最初のクォート版以後、一六二三年の全集フリオ版に至るまでの間、何種の再版をも見ざるは、寧ろ奇とすべき現象なりとす、即ち此劇のクォート版には唯だ一あつて二なきなり。然らば此劇は、他の沙翁劇の如く、餘り世に歓迎せられざりしかと云ふに、否々決して然らず、事實は却つて此劇の甚だ評判良かりしことを證せり、只だ右クォート版の版權所有者に、何等かの仔細有つて、全集出版の年迄二十三年の間、絶えて再版の舉あらざりしものなるが如し。

さて例に依つて、此クォート版と全集フリオ版との差異は如何といふに、此劇の場合に於ては、フリオ版は只だクォート版を翻刻せしに過ぎざるが如しといふ、即ち全集とても事實上別種の種本を用ゐしにはあらざるが如しと云ふ序ながら一六二三年の全集即ちフリオ版には、其序に於て從

來行はれたる沙翁作脚本の單行物即ち各種のクォート版は、何れも正當の手續を經、正當の正本に依りて刊行したるものにあらざる由を公言し、獨り此全集のみ、正當の手續を經、正當の正本に依れるものなる由を陳述しあるなり、それにも拘らず、奈何せむ此劇に於ては、クォート版がフリオ版の原本たりしが如しと云ふ。

(二) 書下の年月

書下しの年月に至つては詳かならず、前述のクォート版には、其表紙に此劇が屢ば演ぜられたる趣を記載しあれば、一六〇〇年に該クォート版の出てし時迄には、既に幾回も演ぜられしと見ゆ、而して吾人が確實に知り得べき事實は、只だ是のみ、是より以上は、悉く推察に過ぎず、然れども多數の

推察者の意見に依れば、グァート版發行の前年即ち一五九九年に於て書下されたりと見るを以て、尤も妥當の見となすべきが如し。

(三) 材料の出處

此劇の源泉と目せらるゝもの二あり、一は十六世紀前半の伊太利詩人アリオストーが「オルランド・フーリオソ」の第五卷侍女ダリンドの物語と稱する一詩にして、他は同じ時代同じ國の詩人バンデロが「コルドナのチムブレオが物語」と稱する一話なり、前者は一五九一年に英譯せられたるのみならず、更に約十年前既に脚本に仕組まれて舞臺に演ぜられたる形跡あり、沙翁は或は該翻譯若くは脚本に負ふ所ありしなるべし、然れども翁が一層大なる感興を惹起し、翁をして此劇を作するに至らしめたる

は、恐らくバンデロが物語なるべしとは諸家の一致する所なり、尤も此劇中の副主人公たるベテデック及びビートリスなる二性格に至つては、全く沙翁が創造にして、アリオストーにもバンデロにも少しも負ふ所なきなり、又此二家に負ふ所と雖も、其荒筋に於て似寄りたる所ありといふ迄にて、人物の性格若くは喜劇的發展の徑路に至つては、例に依つて沙翁獨得の手腕に出づと知るべし。

(四) 梗概

凱旋のアラゴン(西班牙)の太守ドン・ペドロ、其战友フロレンス(利太)のクラウデア及びバチア(利太)のベテデック並びに己が異母弟ドン・ジョネ等を携へ、さる戰場より凱旋の途上、メッシナの市(利太)を過ぎ、市長レオナ

トの許を訪れしに、市長大に之を歡待し、引留めて暫く逗留せむことを請ひ、且つ當夜來賓歡迎の爲め、大宴會を開き、假裝舞踊を行ふこととせり。
レオナトの姪 然るに市長レオナトに一人の女あり、妙齡にして、嫵媚、性質温雅にして、婉柔、名をヘローといふ。又市長に一人の姪あり、同じく妙齡の美人なるが、性質ヘローとは正反對にて、活潑にして、諧謔を好み、日夕見る物聞く物を悉く取つて、己が諧謔、諷刺の種となすの風あり、殊に生涯、獨身主義を標榜し、偶々縁談など持ち込む者あれば、散々に嘲弄して、辱かしめ、云寄る男子などあれば、這々の跡に逢はせて、歸すが常なりき、名はビートルィスと云ふ。蓋し幼少にして、父母に別れ、頼るべき同胞もなく、早くより伯父のレオナト許引取られ、従妹のヘローと共に、姉妹の如く睦みあひて生長ちしと見えたり。

是より先きドンベドロの一行は、出陣の途上にも、メツチナを過ぎ、市長レオナトの許に立寄りしことあり、其際既にヘロー、ビートルィスの兩娘は、此一行の賓客に紹介せられ、ヘローは一行中のクラウヂラの眼に留まつて、此時早くも彼が胸中に戀の種を下ろし、又ビートルィスの快辯毒舌は、同じく一行中のベチヂクに於て好敵手を見出し、女嫌ひ、殊に妻帯嫌ひにして、浮世の事物を冷眼視し、一切の見る物聞く物を悉く取つて、嘲弄の種となすこと、恰かもビートルィスと相似たる此ベチヂクと彼女との間には、輕口惡口の既に幾度か交換せられたりしなり。今復た凱旋の途上再びレオナト邸に此一行の來り訪ふや、先づベチヂクとビートルィスの間に諧謔罵詈の論戰は開かれ、一場の問答あり。又一方には
クラウヂラが懸想がヘクラウヂラは、嚮に出陣の際美しと見初めたりしヘロー

を、今又平和の日に見るに及んで、愛、日の、美、感、は、更、に、進、ん、て、戀、愛、の、念、と、な、り、ぬ。今は此思ひを獨り己が胸中に包むこと能はず、乃ちベテデックに向ひ此戀をほのめかせば、ベテデックは例の筆法もてクラウヂヲを擲擲弄する所へ、ドン・ペドロを進み來り、二人の密話の何たるを糺して此事實を知り、然らば己れ周旋して彼女を足下の妻となさむは如何にと云ふに、クラウヂヲ喜んで之を諾す。即ちベテデックの去りし後にて更に談合し、ドン・ペドロは、其方法として先づヘローが愛を得ることの必要ある由を説き、幸ひ今夜の假裝舞踊場に於て、某足下に代りてヘローの心を敲き、彼女若し足下の妻たるの念あらば直ちに父レオナトに談して彼女を申受けむと約したり。

陰險なるド
然るに此兩人が密談は、ペドロが異母弟ドン・ジョンの一

嬖臣の立ち聴く所となれり。立ち聴きたる嬖臣は早速之れをドン・ジョンに告げたり。ドン・ジョンは、人と爲り陰險にして、異母兄ペドロの快活磊落なるに似ず、嘗てペドロと衝突し、久しく兄弟不和の状態にありしを此程漸う兎も角も表面だけは、和睦の状態に復したれども、尙ほ心中には兄に對して快からず、何がな兄に向て悪戯をと思ひ居る所へ此報を得、殊にクラウヂヲに對しても多少の怨みある所なれば、そは面白し此縁談に何がな故障を入れて慰まむものと、主従額を集めて談合する所ありけり。

假裝舞會
愈よ假裝舞踊會は開かれぬ、主客數十人、男子は悉く假裝して假面を蒙り、各其誰なるやを知られざらむとして、平生の聲音態度等をわざと矯め、以て正躰を暗ましたるまゝ、各々己が好む所の婦人の手を取りて舞踊せり。ドン・ペドロは、ヘローの手を取りて一番の舞踊を試みしが、終

りて後、クラウヂヲと名乗りて、彼女を思ふ心の切なる由を述べ、遂に彼女が愛と結婚の約とを麻ち得たり。かくとも知らず此方には、當の戀男クラウヂヲは舞踊果て、只だ獨り、今更のやうに結果如何と危ぶまれ、心も心ならず假面を蒙りしまゝ、人無き場所に佇み居る所へ、ドンジョン並に彼が腹心の家來共二三人出て來り、早くもクラウヂヲとは見て取るものから、わざと、それなるはベチヂク殿には候はずやと云へば、假裝者の習ひクラウヂヲも、いかにもベチヂクにて候ふと答ふ。ドンジョンは得たりと附け入り、さらば恐兄ペドロの二なき親友と見込みて頼み入ることあり、恐兄にはかねて此家の娘ヘローに執心なりしが今夜遂に彼女を口説落し、父レオナトの許をさへ得たる様子、加之思はざる邪魔の入りぬ先きにと今夜の中に結婚の式をさへ擧げむとなり、然れども此結婚は要するに

不釣合の沙汰たるを免れず、某は絶對的に不賛成なり、何卒足下も日頃の友誼にめて、此儀を思留まらしめ給はるやう、御盡力の程頼み入るゝなりと、誠しやかに述べ立つる心の中は、クラウヂヲをして、ペドロが彼の爲めに、ヘローを周旋するとは、詐り實は己れが持物に横取りせむ爲めの賤親切と思はせ、さてこそ二人の中を離間し、一悶着起さしめむとの作略なりけり。かくとも知らぬクラウヂヲは、さらでだに危疑の念に惱まされ居る最中なれば、一も二もなく之を事實と信じ、ドンジョン等の去りし後、大なる苦悶を表し、我が戀を人手に任するの愚なるを悔ひ、此上は他にせむ様もなし、ヘローは見すゝペドロに取らるゝとよと悲み居る所へ、悪口好のベチヂク出來り、これ亦ドンペドロが彼の愛人を横取せし由を告げ、散々に擲論すれば、クラウヂヲ今は席にだにえ堪へず退き去れり。

然れどもクラウヂヲが誤解は、之が爲め何等の悶着をも起すの暇なく、ドン・ペドロのクラウヂヲを招ぎて委細の事實を告ぐるに及びて、一切の疑問氷解せり、加ふるにヘロー自身並に父レオナトの出来りて婚約の成れる次第を物語り、今日より一週の後結婚の式を擧ぐべきを約するを以てす。クラウヂヲの喜び思ふべし。此時ビートルリス嬢も席に在り、新郎新婦の婚約を祝しつゝ、例の諧謔に一同の頤を解かしむること暫くにして、所用の爲め獨り席を起ちしに、後に残れる一座の面々彼女の快活にして頓知にたけたるを賞し、更に彼女とベテヂックとの間の論戰を評しなどしたる末、彼等二人を夫婦となさば如何と云出るものあり、一座爲めに洪笑せしが、ドン・ペドロは曰く、否なこは強ち爲し難きの業にあらず。列席の諸君にして各一臂の勞を惜ませ給はずば、我に一の方略あり。此事成就

は疑なしと、レオナトを初め一座の面々、そは面白し、兩人の爲め悪き事にもあらねば、必ず共に盡力せむと云ふに、然らばとてペドロより其方略と云へるを一同に傳授あり、かくの如くにして、男の中の難物と、女の中の難物殊に何れも他を二なく憎きものに思ひなせる此兩人は、戀て相思ひ相慕ふに至るの運命を、人工に依つて賦與せられたり。

終結の略 此方略の傳授せられたる後の事なり。或日ベテヂックは獨り庭園内の、忍冬の繁り合ひて、自然の屋をなしたる四阿の中に潜み、愛讀の書を取寄せ、讀書に耽りつゝありしに、ドン・ペドロ、レオナト、クラウヂヲ等二三の樂人を伴ひて出て來り、ベテヂックが此處にあるぞとも知らぬげに、四阿の傍に來りて立寄り、先づ樂人をして絃を鳴らし、歌を唄はしめて樂み居しが、戀て樂人も絃を納めて立去れば、後にはペドロ、レオナト、クラウ

チヲ等、ビートルリス嬢の噂を語り、彼嬢が表面は爾かく憎み厭ふやうに見せ懸けながら、内心は甚くベチヂックに懸想し、戀慕の情制へ難きも、彼女の氣性として、又日來の意地づくより、かくとだに表へ出し云ふこと能はず、ましてベチヂックに對し、我は卿を愛すとは死すとも云ひ難しとて、獨りくよくくと鳴かぬ螢の身を焦す様いぢらしともいぢらしく、之が爲め、夜も碌々險は合はず、夜半俄に臥蓐を蹴つて起上り、寢衣のまゝ机に向ひ、己が心のたけを水蒸の跡に托して、一通の文書を調ふるよと見る間に、又忽ち寸断々に引裂き、髪を拂り胸を打ちなど、今にも狂せむばかりの舉動を爲すに、同室に臥し居るヘローは、之が爲め甚く心痛なし居る由を、悉くヘローの談話なりとて語り合ひ、各且つ驚き且つ怪みつゝも、信じて疑はざるが如き語氣を漏らし、果てはベチヂックの冷酷を非難し、ビートルリス

を憫むなど、何處迄も眞面目を装うて、遂にまんまとベチヂックを計略に陥せし様子を見届け、又素の如く何げなき風して立去りたり。此方なるベチヂックは、四阿の葉蔭に潜み、首尾克く潜み了せたる心地にて、彼等の談話を聞き了りしが、餘りの意外に驚き怪みながらも、勢ひ之を信ぜざるを得ず、苟も之を信ずる上は、早や事定まれり。男女を問はず、異性より戀慕せらるゝ由を聞きて、心忽ち綿の如くならむとするは、誰人も有する所の弱點なり、いかに世を拗者のベチヂックなりとて、苟も人情を具ふる上は、此方則に戻ること能はず、彼は此時より所謂心機一轉せり、既に一轉せる心眼を以て、ビートルリスに對すれば、彼女が澁面も罵詈も嘲笑も諷刺も、悉く戀を物語るの象徴ならざるはなし、憎しと思ふ心はいとしと思ふ心となれり、昨日迄の無妻主義は、敝履の如く棄てられたり。

又一方に於てヘローは、其侍女マロゴロツトと共に、同様の計略をピートリスに向つて施したり。即ちこれも同じく庭園内を、主従相並んで散歩しつつ、ベテチックのピートリスに戀ひ焦がるゝ趣を語り、別に一人の侍女をして密かにピートリスを、彼の忍冬の四阿内に迎へ、潜んで此談話を漏聞せしめたり。彼等は先づベテチックの得難き好男兒なる由を、語を極めて賞揚し、かゝる好男兒に戀慕はれながら、顧みもせぬピートリスの女冥利に盡くべきを云ひ、彼女が男子に對する偏狹なる考を攻撃し、さる執拗なる彼女の性質を熟知するが故にこそベテチックはさしも戀焦がれながら、其心中を彼女に向つて披歴することもなく、哀れや埋火の下にのみ燃えて、遂には音もなく消え失せむ有様、戀故とは云ひながら、さしもの勇士の此道には手向はむ刃もなく、今は御命の程も覺束なくなど、誠

しやかに語り合へば、四阿の中のピートリスは道がに女なり、夢に夢みる心地して、一度は驚き迷ひながらも、此上は娘の意氣地も、日頃の高言も、今はた拘づらふべきにあらず、此戀に報いてやはと決心するに至りぬ。
ト・ジョンが 第二の計略 さて又彼のドンジョンは、ベドロとクラウチアとの仲を離間せむと試みしが、少しも其効なかりしにぞ、茲に第二の計略を試みたり。そは彼が嬖臣ポラチアの發議にかゝるものなるが、ポラチアは豫てヘローの侍女マーガレットと情を通じ居るを利用し、折もこそあれ結婚の前夜といふに、彼のマーガレットにヘローの外套を着し、ヘローの如き風采をなし、深更ヘローが寢室の窓より首を出し、窓外に立てるポラチアと言語を替はさしめ、ポラチアは亦、此マーガレットをヘローと呼び懸けて戀慕の言を發し、恰かもヘローが或る情夫と密會するが如き態度を装はしめ、

さて一方にはドン・ジョン自ら東道の勞を取りてドン・ペドロ・并にクラウチヲを庭内の一隅に誘ひ來り、遠くより此光景を一見せしめたるなり、此に於てペドロ・クラウチヲの兩人は前日ドン・ジョンが口より聞きたるヘローは處女にあらずとの非難の決して無根の譏謗にあらざるを知れりとなし、此上は明日結婚の席上、神の祭壇の前、滿座の中にてヘローの罪惡を許さず、散々に辱かしめ、以て胸中の鬱悶を晴らさむと語り合ひ、さて無限の怨恨を飲ひて歸館せり。

然るに、彼のボラチヲは、此報酬としてドン・ジョンより一千兩の謝金を得得々として意驕り氣揚りつゝ、其場より直ちに彼が同僚コンラドなるものと共に、何處にてか酒を飲み快を極めての歸途なるべし、今夜の出來事を得意氣に物語りつゝ、大道を來れるに、折悪く今夜に限り、レオナトが

館の近傍に辻番を張れる夜番の者共此談話を聞取り、さてこそ容易ならぬ陰謀なり、それ曲物搦め取れと、四方より寄つて懸つて高手小手に縛めて引去れり。

明くれば結婚の當日となりぬ、レオナト家には萬端の準備漸う調ひ、花嫁ヘローは今日を晴と着飾りて、衆人に擁せられ結婚の式場なる市の寺院へと赴きぬ、父のレオナトも共に立出てむとしけるに、市の目附役ドックベリ及びヴァチスなる二老人、一大急用と稱して面會を乞ふ、こは昨夜辻番の番人等が立ち聞きたるボラチヲ等の儀に關し、市長が未だ結婚の席に臨まざるに先だち、之を告げ置くの要ありと考へ、さてこそ一大急用と稱して面會を乞ひつるなり、然れども此ドックベリ、ヴァチスなる兩老人は、此物語中尤も滑稽なる人物の一にして、一躰に鈍く、へち難く、廻りく

どく對談徒らに冗長にして要領を得ざること夥しき男共なれば、さしもの一大急用を陳述するに當つても、悠々閑々たる態度平常の通りなれば、心も心ならぬレオナトは皆まで聞終らず、何れ委細は後刻聽聞せむ、怪しき男を捕へしとならば、其糺問は卿等に委ねむと云ひも果てず草々に出行きたるぞ、後に思へば口惜しさの極みなりける。

結婚式の
惨憺場

後れ馳せなるレオナトの到着と共に、結婚の儀式は始まりぬ、

併正フランシスは、嚴かなる定例の式言を以て、新夫婦に向ひ、今に於て云ふべき事ありやなしやを問へば、意外にもクラウヂヲは屹然として面を上げ、我はかゝる姪婦と婚を結ぶことを肯んずる能はずと叫び、昨夜目撃せし光景を告げ、ヘローは既に處女にあらざる旨を斷言し、涙を流しつゝ、其不貞操を責め極言罵倒痛切を極めたり。列席の男女餘りの不思議さに

驚き呆れざるもなき中に、レオナト、ヘロー父子が驚愕一方ならず分きてヘローは夢かとはばかり、餘りの意外に初めは新郎クラウヂヲの物にや狂ひしと疑ひしが、正しく正氣眞面目にて、己れを攻撃するを知り、口惜しさ堪へ難けれど、辯解の辭とても出づるに由なく、遂に、其儘、其場に卒倒せり。ヘドロー、クラウヂヲ等は、さてこそ人は知らじと思ひし、秘密の罪惡を満座の中に誣かれし耻かしさに、身の置處なく、かくは卒倒せしものなむめりと高言しつゝ、悠々と其場を立去りつ、後にはピートリス泣きながらヘローを介抱しつゝありしが、繼てヘローは蘇生りぬ。父レオナトは娘の不貞を責め、彼の名譽を重んずる二人の貴人（そぞ）が、現在目撃したりと云へば、よも跡方もなき讒謗にあらじと且つ悲み且つ憤りつゝ、さて汝の通じたる男といふは何者ぞと問ふに、ヘローは些の覺えもなしと答へて、其身の潔

白を辯解せむと力むれど、乃父が疑は容易に解くべくもあらざりしを、先刻より只だ黙してヘローが容貌言語等を觀察しつゝありし、併正フランシスは進み出て、令嬢には恐らく何等かの誤解を買ひしならむ、眞に罪を犯せる者は、かくの如き風采態度を持するを得ず、されば必ず此冤罪は後に晴るゝの期あらむ、然れども差當りへ、ローは先刻卒倒せしまゝ、遂に蘇生せざりし由を披露し、定例の葬式を出し、追善供養型の如くに取行ひ、以て一時世間を伴らむは如何に、さらば世間の同情は必ずヘロー殿が一身に集り、彼クラウデオ自身すら、尙ほ且つ己が殘酷を悔ゆるならむ、さてかくして徐ろに冤罪の晴るゝ機來るを待ち候へ、彼等が誤解の原因若くは勘違への理由は、かくてぞ速かに現れ來らむと熱心に勸誘したり。ピートリースに力を戮せ、ヘローの介抱がてら、此時迄留まり居たるベテチック將

たレオナトに向ひ、此併正の勸告に従ふの利なるべきを勸め、己れはペドロ、クラウデオ等と親善の仲なれど、此件に關しては、レオナト方となりて、彼等に對しても此秘密は必ず固く守るべしと約するに、レオナトも直ちに之に同意し、併正の勸告通りに執行ふべきを云ひ、密かにヘローを伴ひて寺院を退去せり、此一同の退去したる後の事なりき、互に相慕ふに至れるベテチックとピートリースとは、只だ二人式場に留まりて、初めて其心中を打明け、晴れて戀慕ふ仲となれり、然れども何れ劣らぬ拗者ヤバものの戀なれば、二人の間に交されたる詞といふも、世間並の甘き優しき睦言には、あらざりしなり、且つピートリースは、ベテチックに向ひ、己れに對する愛情を證せむが爲め、從妹、ヘローの仇、クラウデオと、決闘し、之を倒すべしとの難題を要求せり、ベテチックも追がに愕然として初めは之を否みしが、遂に之を

諾するに至りし心中は、今日のクラウヂヲが舉動を以て穩かならずとなし、ヘローが冤罪を半ば信じ居たるにも依るならむ。

ヘローはかくて全く死せるものと披露せられ、葬式萬端型の如く、取行はれしが、實はレオナト邸の一室に隠まひ置かれたりされど父のレオナトが愁傷は實際彼女が死亡せるにも劣らず、外の見る目も哀れなりしが、其胸奥にはベドロ、クラウヂヲを疑ひ且つ怨むの念むらくと湧出せり、剩へ舍弟のアントニオは愛姪ヘローの受けたる侮辱を以て、是れ亦冤罪なりと信じ、ベドロ、クラウヂヲを惡むこと一方ならず、老たりと雖も、己れヘローが爲めに此冤罪を雪がむ、即ち刃に依つて正邪を判せむと奮ひ起てり、さればベドロ、クラウヂヲの兩人を見るや、彼等と呼んで惡漢卑怯者となし、其罪惡を面晰し、殆んど其場に一場の修羅場を現せむとし

たり、又一方にはビートリスに代り、ヘローが冤を雪がむとの約束を訂したるベテヂックのあるあり、同じくクラウヂヲに向つて決闘を申込めり、道がのベドロ、クラウヂヲも大に避易の風あり、此跡始末は如何になり行く事と思ふ中、彼目附役のドツグベリ、ヴァデスは囚人ボラチヲを糺問して、ドンジョンが陰謀、ヘローの冤罪等悉く判明せるに會す、是に於てベドロの驚きクラウヂヲの後悔一方ならず、レオナトに向ひ只管罪を謝し、此上は此身の所罰は一に貴殿の好む所に任する由を云へり。

レオナトが奇なる要求　レオナトは之に對し、果して如何なる要求を呈出するやと思ひしに、某の足下に望む所は、これより娘ヘローが冤罪を、足下自身の口より滿天下に告白し、又ヘローが墳墓の上に、追悼の辭を掲げて衆人に示したる上、某が指示する所の一婦人を娶りて夫人と爲し給へ、其の婦人と

云へるは、即ち舍弟アントニオが女にて、容貌風采不思議にも死せるヘローに酷似せりと云出るに、クラウヂヲは唯々として之に従ひ、さて此上は今夜の中にヘローが墳墓へ追悼の辭を掲げ、明朝早速第二の結婚を執行せむとの約を結びて出去れり。

第二の結婚
二對の新夫婦

ヘドロ、クラウヂヲは、約の如く其夜ヘローが墳墓を訪ひ、追悼の辭を朗讀し、之を墳墓の上に掲げ、怒ろに吊らひたる上、翌朝早々衣服を改め、レオナト許赴けば、はや一室の中には結婚執行者フランシス併正も來會し、二人の入來を待ち居たり、さてレオナトの合圖に従ひ、出来る花嫁は如何にと見てあれば、アントニオに導かれ、顔は覆面のまゝなれば、如何なる顔ぞとも見分くるに由なし、されども式の終る迄は覆面を去ることなかれとのレオナトの指揮に、道がに氣遣はれつゝも手を取りて結縁の

誓を立てたる後、初めて覆面を取り、其顔を見れば、こは如何に紛ふ方なきヘローなるに、クラウヂヲが喜び夢か現かとばかりなりけり。又此席上にてベチヂックは、ビートリスとの結婚を申出でしに、レオナトは一も二もなく之に同意し、フランシス併正亦之を賛成し、然らばいざといふに臨み、ベチヂック、ビートリスの間に數回の問答あり、之にて彼等が互に他より慕はるゝと思ひ込みしは、全く他人の計略なりしこと判明せり、然れども一度起りたる戀の熱は、之が爲め、冷却すべくもあらず、遂に二人は、相擁して相接吻せり、それより一同は結婚の式場神の聖壇の前に進まむとするに先だち、先づ一番の舞踊を試みることに、なり、一對の新夫婦を初め、一同相携へ賑やかなる舞踊をなして幕となる、之と同時に一度逃亡したるドンジョンは、逮捕せられて再び送還せられたる由の報至る。

(五) 此劇及び登場人物の性格に就て

此劇は沙翁が喜劇中の傑作と稱せらるゝものにして、讀者に快感を與ふること、他の喜劇中にも之に勝れるは尠し、其特色は優美にして温雅なる感情と滑稽趣味との適度に融合せられたる所にあり。ベテチックとピートリスとの詞合戦の如きも、互に鎬を削りて毒舌を弄しあへど、粗野に流れず、又野卑に陥ることなし。殊に讀者に笑を強ふるが如き刺撃性の滑稽なく、又相互の胸に侮辱的の大負傷を與ふるが如き言語を用ゐず、譬へば二人の詞合戦は正々堂々たる擊劔の試合の如く、其一撃一突は、如何に激しく急所を衝くとも相手に傷を付け一滴の血をだに流さしむることは斷じてなし、是豈に紳士淑女たるの躰面を損はざるものにあらずや。

や。

此喜劇中の重なる性格は、前記のベテチック、ピートリスを第一とし、次にクラウヂヲ、ヘロー及び目附役のドッグベリ、及びヴァデスとす。

ベテチックとピートリスと 此二人の性格の重なる特色は、社會の習慣律に拘泥せず、皮相の道德を眼中に置かざるとなり、此故に彼等は、著く世を拗者の觀あれども、實は至つて正廉潔白、俯仰天地に耻ぢざる底の意氣あるなり。然れども凡そ世に畸人と稱せらるゝ者の特色は、皆な斯の如く、内に正廉潔白の精神あり、而して外社會の習慣律を超越するに在りとせば、此二人の如きも確かに畸人たるに相違なし。故にベテチックの如きは、如何に見るも高襟才子風の當世男とは見え、又温厚にして上品なる貴族の若殿とも受取れず、惡詭諷刺口を衝いて出て、女を罵り、戀を嘲り、結婚を笑ふ所、畸人の

本性に違はず、然れども思ふにこれは俗悪なる世間の風習に漂ふ女を罵り、風習に従つて爲す戀を嘲り、風習に従つて爲す結婚を笑ふに過ぎず、されば己れさへ憎しと思へるビートルリスが己れを戀ふを聞いて、己れ又戀慕の情を生ずるや、聊かも悪びれたる氣色はなく、斷乎として此情を打明け、斷乎として結婚を實行せる、寧ろ男らしさの頂上にはあらずや、又彼とベチデックの間には、當人同士は却つて心付かず、に、あ、れ、ど、最、初、よ、り、戀、慕の萌芽を有したりと、説く評家多し、其故は互に他に向つて惡諛の語を放ち、互に他を以て嘲笑の目的物となし、二人一所に在れば必ず寄り添うて、一場の修羅場を現出せては止まざるが如き觀ありと雖も、これは即ち此の二人が常に相互に意を注ぎ、互に他を顧みては、あ、ら、れ、さ、る、の、證、に、し、て、一歩を轉ずれば、戀愛は忽如として成立すべかりしなりといふに在り或は

然らむ。ビートルリスは大躰に於てベチデックを女にしたるが如き婦人なるが、其從妹ヘローが彈該を受け一座の面々何れも半信半疑なるの時、彼女獨り斷乎として之を信ぜず、ヘローの貞操に向つて一毫の疑をも挿まず、こは冤罪なりと叫びたるは彼女の氣品を高むること幾何ぞや、然れども此の如き婦人は我國の讀者の眼を以て見れば、或は恐る、甚だ好ましさ女性にはあらずらむ、婉柔雅順を以て深窓佳人の理想と爲し、此尺度に依つて批判せば、ビートルリスの如きは、縱令其精神は嘉すべきも、其言行は下劣なりとの感を起さしむることなきか、否な我邦人のみならず、彼國の評家の間にもビートルリスに對する褒貶の語は此點に於て隔々たるを免れざるなり。

ラ、ヘ、ロ、ウ、グ、ナ、ク、 ベチデック、ビートルリスと著き對照をなせるはクラウヂラ、

ヘローなり、前者が浮世の習慣律に拘泥せざるに反し、後者は徹頭徹尾習慣律を脱すること能はざる浮世人なり。但しヘローは習慣律を脱すること能はずといふに留り、其性行には何等卑屈醜汚の點なく、浮世の事物に反抗せむとの勇氣もなき代りに、ビートルズの如く跳反はるかへならず、温順寡言何事も控目勝なること、我邦の婦人に似たり、故に無實の彈詿を受けて卒倒するや觀者の同情を惹くこと非常なり。又彼女は何處迄も貞淑の素質を有する淑女なるが如し、只だ其淑女たるや、受働的消極的にして、發働的積極的の淑女にはあらず。但し世人の多くが婦人に望む所も、亦此の如きに過ぎざれば要するにヘローの如きは尤も弘く歡迎せらるゝ所の淑女ならむ。クラウヂアの性行に至つては則ち大に非難すべき點多々之あり。但し吾人が所謂難點は決して悪意悪行を意味するにあらず、卑怯未練の

四字を以て、大抵盡すを得べき性行を意味するなり。先づ彼はクラウヂアを手に入れむが爲め、之が周旋方をベドロに托せり、苟も己が一身の大事を托するからには、豫めベドロに多大の信用を寄せしと認めざる可からず。然るに彼は口頃より心直ならぬドンジョンの一言に依つて、直ちにベドロの行爲を疑ひたり。次に愈よ婚約も調ひたるの曉、又しもドンジョンの讒訴に動かされ、自ら見、自ら戀ひ、自ら請うて、約を訂したるヘローの貞操を疑ひ、深く實否を糺すこともなく、場處もあるべきに結婚の席上、神壇の前萬座の中にて、昨日迄生命よ天使よと戀焦がれたる愛人の面皮を剥ぎ、之が生涯の名譽を奪ひ、そが卒倒せるを以て我が復讐は成れりとばかりに揚々たり。さて後にヘローが冤罪を知り悔恨の念に責めらるゝや、レオナトに對し謝罪の意とは云ひながら、其冤罪故に最愛のヘロー

は死せりと信じつゝも、尙ほ他の婦人との結婚を諾せる心事は決して男らしさの頂上とは云ふ可からず、詮じ來ればクラウチヲの性格はベチヂックの性格と正反對とや謂ふ可からむ、蓋し社會の潮流に、噉嚼する、輕薄才子は、古來皆な此の如きなり。

トッゲアベリとゲアベリス 此劇中にて尤も滑稽なる場は、此等兩人の登場する場にぞある。老態遲鈍而かも尊大己れを持し、暫しも己が威嚴を失墜せざらむと力め、言語舉動一々此精神より出て、上に對しては最大の敬語を少しも省略することなしに用ゐ、下に對しては、成るべく難澁の言に難有味を附け、之に加ふるに所謂しかつべらしき態度を以てす故に、其云ふ所愈よ眞實にして、愈よ要領を得ず、彼等自らは何處迄も眞面目にして、些の滑稽を解せず、而かも他よりして之を見れば、愈よ眞面目にして、愈よ滑稽なり。

此の如きは我國にも古來老朽官吏などの中に、往々見る所の性格なるが、彼國にもドッグベリ、ザアデス、以來幾多の脚本小説類に此の如き性格の描寫は試みられたりといふ。

此他ドン・ベドロ兄弟、レオナト兄弟の性格もそれ〴〵に書き分けられてはあれど、前記の諸性格の如く著しきものにあらねば略して云はず。

解説 終

マッチ、アドー、アバウト、ナツシニング
(から騒ぎ)

登場人物

ドン・ペドロ アラゴンの太守
 ドン・ジヨン 右の異母弟
 クラウヂヲ フローレンスの若き一貴族
 ベネヂツク パチユアの若き一貴族
 レオナト メツシナ市長
 アントニオ 右の舎弟
 バルセイザア ドン・ペドロに仕ふる樂人
 コンラド ドン・ジヨンの家來
 ゴラチヲ
 フランシス僧正
 ドツグベリー 目附役
 ヴァーヂス 同上

オートケイク
 シーコール
 夜番人

番役一人
 使童一人

ヘロイ レオナトが女
 ビートリース レオナトが姪
 マーガレット
 ウルスラ
 ヘロイの侍女

此他使者夜番人従者等大勢

場所

メツシナ市(伊太利)
 (時代は十四世紀頃)

マツチ、アドー、アバウト、ナツシング

第一幕

第一場 レオナト家館の前

レオナト(メツシナ市長)ヘロー(レオ)の女
 ビートリース(レオ)の姪及び一人の
 使者(ドン・ペドロ)の公の登場

ナレオ 此書面の趣では、アラゴンの太守ドン・ペドロ様には、今夜此メツ
 シナへ御着との事。

使者 最早追つ付御着なされましよう、私へ御書面を下されたのが、遂此
 先三里足らずの處でムりました。



「かたしまれさなげ上引御を地戦も生先道剣のおし申」トービ
 「やら事の誰はるぬ草の許其」オレ

レオ して此度の戦争で討死なされたは、大凡そ幾人程ぢや。
 使 少々粒立つた所が二三人、名ある御方には一人もムりませぬ。
 レオ 兵を全うして凱旋とは、重ねくの大勝利して又太守には、クラウ
 デヲと申さるゝ、フロレンスのさる若殿に、莫大の御恩賞を御授け
 なされたとある。

使 實に其若殿は、目覺ましい御軍功、太守の御恩賞も御當然、まだ若年
 の御身に似氣もない、羊の様な優しい御顔で、獅子奮迅の大働き、貴大
 人方の、大方御思ひもつかれぬ程、偉い御軍功でムりました。

レオ 此メツシナの市に、彼若殿の叔父なる者がムる、かくと聞いたら、嘸
 喜ばれる事であらう。

使 イヤ私は、既に其御方へも、御書面を御届け申して参りました、實に

一方ならぬ御喜び、イヤ喜びも極まれば悲しいとやら、其悲しみ故に、彼の様な御喜びも、しほらしう見られます。

レオ さては喜び涙にくれたと見えるな。

使 果てしもなく御泣きなされました。

レオ 優しい真心まごころの、自然と溢れ出たのであらう。げにその様な泣顔程ほど、實の籠つた顔はない。愁傷事うれひごとのある時の、笑顔は憎體にくみぢやが、喜び泣はしほらしい。

レオ (使者に) 申し、あの剣道先生も、戦地を御引上げなされましたか。

使 其様な御名前は存じませぬ。左様な御方は、卒つひは知らず士分しぶんの中には、何れの陣にもムリませなんだ。

レオ 其許そこの尋ぬるは誰の事ぢや。

ハロ バデユアの若殿ベテデック様の事でもりませう。

使 おゝ其若殿ならば、矢張り御凱旋でもります。そして例の通りの御元氣で。

トビ 其ベテデック殿が此メツシナで、武道試合の帖紙を出し、弓射る業なら戀神でも、相手をすると言き付けたを、叔父君の御抱えの道化坊が一目見て、戀神に成り代り、烏嚇しの弓矢を持ち、勝負々々とおとなひ込んだは、一興であつたわいなア。――してベテデック殿には、今度の戦争で、幾人敵を殺して食られました、ハテ幾人御手に懸けられました、イヤ、彼の殿が手に懸ける程の屍骸は、ほゝ此妾が食て見せうと、御約束を致して置きましたわいな。

レオ イヤ其許は、餘りベテデック殿にからかひ過ぎる、とは申せ彼殿は、

實正其許には好い敵手。

使 今度の戦争では彼の君も、大きな働きを遊ばしましてムります。

トビ とは陳腐くなつた兵糧を、食べる手傳でも致されたか、大食に懸けては、通れ大將、丈夫な胃の腑を持たせられる。

使 そして姫様方の前ながら、眞實通れの武將で入らせられます。

トビ イヤ、姫様方の前では、通れの武將でも、殿方の前では何とあらう。

使 殿方の前の殿方、男の前の男、何處ぞと申して、點の打ち所のない、智仁勇を固めて、拵へたやうな御方でムります。

トビ げに、固めて拵へたやうな御方ぢや、偶人の坊ぢや、去りながら、偶人の――イヤなう人間は、誰しも人間だけ。

レオ コレ使者、此女は身共が姪、此様な事を申して、嘸かし不審にあらう。

去りながらベチデック殿と此女とは言葉敵二人が顔を合せば、輕口惡口、詞合戰の始まらぬ事はない。

ビ― 乍去御氣の毒や、何時も彼殿の負續け、遂此前の合戰にも、御智慧の八分は重傷で踏躓、残る二分で、あの圖體を御始末なされてぢや、イヤ去りながら、其二分は大切にして、わが乗る馬と間違はれぬ印になされるが宜いわいな、それさへ失せたなら、畜生と差別する事も成るまいが——して唯今では、何誰と別懸になされます、月の變る度に、新しい義兄弟を拵へると申す御性分、

使 イヤあられもない事。

ビ― イヤ彼の君には常の事、友達への義理立などは、頭巾の流行と心得て、新型の出る度に取替へられます。

使 ハテさて彼の殿の御名前、は、姫様の御手函の、金蘭帳にはないと見える(兼ねて親善なる仲にてはなしと見えたりの意)

ビ― 何のいな、若しあつたなら帳面ごと焼いて棄てう。して別懸にせらる御方は誰ぢやいな、誰ぞ騒々しい若い御方で、邪道の友と親まれる人がありさうな事ぢや。

使 あの御品高いクラウヂヲ殿と、いから別懸になされます。

ビ― さて、クラウヂヲ様は、飛んだ病氣に見込まれたやうなもの、疫病神よりも取りつき早いベチデック殿、取つかれた當人は、間もなく亂心致されう。御氣の毒はクラウヂヲ様、ベチデック病に御罹りなされては、先づ御全快迄に、千兩、二千兩の御散財は免れまい。

使 イヤ姫様、詞合戰これで御免を蒙りませう。

ビー あゝもう廢止に致さう。

レオ さういふ其許も、亂心致さぬがよいぞ。

ビー 致す事ではムりませぬ、せめて暑い盛りの七月迄は、

使 それ／＼ドン・ペドロ様には、早御着ヒキヤクなされました。

ドン・ペドロ(アラゴン)の太守(ドン・ジョン(上の異)の若貴族)の

チゲツク(バグ族)及びマルセイザ(下の侍者)登場

ロイド これは／＼、レオナト殿、御厄介に罷り出てたを、御出迎恐縮々々、冗

費と見れば逃げ隠れる世の中に、貴殿は進んで御迎へなされる。

レオ イヤ、厄介は閣下の御姿を致しては参りませぬ、其證據は厄介が往ぬれば、後は楽しい筈でムるに、閣下の御歸りなされた時、残るは何時
も悲みばかり、たのしみに逃げられます。

ハド イヤ、貴殿は、餘り御自分の御煩業を御拂ひなさ過ぎる。(と願ひて)こ
れはたしか御息女でムつたな。

レオ いかにも此女コメの母なる者が、左様でムると申して居りました、アハ
、、

ツベ子 ア、ア、さては貴殿には、それに就き何ぞ御疑が有つて、ツザ／＼
御糺しなされましたか。

レオ イヤ、ベテデツク殿、幸と其時分は、貴殿の様な好男子が、まだ御幼少
でムつた故、其様な疑を抱くこともムりませなんだ。

ハド ヤア、ベテデツク殿、一本参られたな、これで只今成人の和殿が、如何
やうな人物といふとも推量が成ります——實に／＼御息女は父
君生寫し——御喜びなされ御息女、よう父君に背て居らせられます。

とパドロー、レオナト二人少しく傍へ寄り、他の人々より
離れて語り居る

イテ (パドローの聲がかり) いかレオナト殿が父君で其父君によろ
てゐると、彼の若い御顔を、彼の寄つた古い御顔と、御取替へはな
れまい。

ピ一 これはしたりベテデツク様、まだ喋々つて御在なさる、誰も聞人は
ムりませぬぞへ。

ベテ これは、御つむじの曲り姫、まだ生きて御在なされたか。

ピ一 ハテ、ベテデツク様といふやうな、油の差手のある中は、どうしてつ
むじの曲りが死にませう、貴郎が御出なされると、いかなお人柄も、直
ぐにつむじは曲りまする。

イテ さて、お人柄と申すは、至つて機嫌の變り易いものと見える。

一とは申せ、某はかう見えても、いかなる婦人にもいとしがられます
る可愛がられぬは、ただ貴嬢にばかり、それにつけても、何故某が胸は、
此様に冷やかであらう、眞實某の方より、可愛がる婦人は一人もない。

ピ一 それでこそ婦人の幸福さもなくば、仇いやらしい袖引き褌引き、さ
ぞまつこい事でムりませう、とはいへ難有や妾とても、幸ひと血の氣
薄く、戀知らぬは御同様、いとしい可愛いの、甘つたるい追従を聞くよ
りも、鳥を吠ゆる犬の聲を聞くが、まだしもと存じます。

ベテ 何卒何時迄も、御其心持が願はしい、それでこそ何處ぞの男が、顔に
女房の爪の跡を、つけられる御難が助かると申すもの。

ピ一 尤も貴郎のやうな御顔なら、引搔いたとて、別段それより醜うはな

りますまいが。

ベリ イヤさういへばかういふ此方の言葉を直ぐに其まゝ云ひ返される。鸚鵡の師匠をなされば宜い。

ピ一 此の舌が鳥類の師匠なりや、貴郎の舌は獸類の師匠でムりませう。

ベチ 善く廻る御舌ぢや、某の馬などが、其様に早く駆け廻らうなら、それこそ逸物でムらうに。去りながら何とでも御勝手に仰せられい、某はこれにて御免を蒙りませう。

ピ一 例ながらの御逃足、今に始まつた事ではない。

ハド (方レオと共に此) マアかうぢや御聞き下され。クラツデヲ殿ベチデツク殿和殿等一同をレオナト殿から、わざ／＼の御引留ぢや、然らば一と月は屹度逗留致さうと、某より申上げたりや、何卒一日づゝも、餘計

の滞在を御冀望との事してレオナト殿には、心にもない御世辭などを仰せられる仁ではない、全く御心よりの仰せてムることは、某が誓つて保證申す。

レオ ベドロ一殿、其御誓言は決して御忘れあるな——(下レオ向ヒ)閣下にも何卒御逗留下さりませ、御兄君と御仲直り遊ばされた上は、決して御疎畧には致しませぬ。

ヨドレオ 然らば閣下、何卒かう御先へ御出下され。

ハト レオナト殿、御手を御貸し下され、御一緒に参らうではムらぬか。

とベチヤツク、クラツデヲの外一同退場

クラ イヤ、ベチデツク殿、レオナト市長が娘御に、よう目を留められました

たか、

ベテ 別に目は留めませぬが見ることは見ましてムる。

クラ 何と淑雅と致した婦人ではムらぬか、

ベテ 其御詞は某に冗談でもなく、洒落でもなく、飾氣のない正直な批判をせいとの事てムるか。但しは日頃女性といふものを輕侮しつける、
某が例の筆法で、悪口を敲かせうとの事てムるか。

クラ イヤサ、何卒生真面目な批判を聞かせて下され、

ベテ ハテ實の處某には高尙いと申す程高くも見えず、艶麗と申す程の色澤にも見えぬ、是はと讚める程の尤物とも見えませぬ。若しあれより少しも劣つたなら既に醜といふ方に入りませう。彼程の容色では、某には餘り好もしうもムらぬ。

クラ いや貴殿は、某が冗談に御尋ね致すと思はしやる、何卒てムる、眞實

貴殿の御意見を聞かせて下され。

ベテ 其様に某が評價を御尋ねなさるは、貴殿彼女を御買ひなさる御意でムるか。

クラ いや世界の金銀を積みばとて、彼の様な寶が買へるもので、

ベテ 買へますとも、箱造つけて買へます。乍去貴殿は眞面目でそれを仰せられるか、但しは内心笑ひながら、やれ盲目の戀神が、兎狩には一番目敏いの、やれ大工は鍛冶の、ブルカンに限るのと、しかつべらしう仰せられるのではムらぬか。コレサ何處を押したら、貴殿の本音が聞かれるてムらう。

クラ 某の眼には、彼の様な美しい婦人を見るは、是が初めてムる。

ベチ 某の眼は、まだ眼鏡なしに物を見ますが、其様な美しい所は遂に見留めませぬ。却つて彼の婦人の徒妹に當る、ピートリス殿こそ、彼の騒々しい氣立がなかつたなら、幾倍美しいか知れませぬ。彌生初旬の春空を、大晦日の霜枯空に比べたやうでムる。それはさうと貴殿には、まさかに女房持に成らうなどいふ、御心はムるまいが、さて如何でムるな。

ベチ いかにも女房持にはならぬと、誓文迄立てた身でムるが彼のヘロ、を女房に持てるなら、それは何共我身ながら疑はしい。

クラ 眞實其様な御心になられましたか、さて、世間には、こわく頭を撫てぬ男は(頭上に角の生えざるやを懼れてなり、女房を盗)たゞの一人もない事か、六十の未婚男は最早見る事が叶はぬか、ハテ然らば貴殿

も我から輒に首を突込み、自由ならぬ身となつて、獨身者の楽しい安息日を、世の常の亭主並に、溜息吐息で過ごさるゝのぢやな。イヤ御覽あれ、ドンペドロ公が、貴殿を尋ねに引還して御出なされた。

ドンペドロ 登場

ペド これ、貴殿方は、レオナト殿の後に尾て參られぬが、何内匠話を致されてぢや。

ベチ 滅多には申されませぬ。乍去餘儀ない義理で、白狀致すやうに御仕向け下されば、兎も角もてムる。

ペト 然らば日來の好誼もある事、是非御話し下されい。

ベチ クラウデヲ殿御聞なされたか、某とても啞の様に、黙つて過ごせば、過ごされる、成らば貴殿にも、其様な人物と思はれたいが、彼の様に公

爵から、日來の好誼と仰せられては——好う御聴きあれ、日頃の好誼と仰せられては、義理としても申さねばならぬ——即ちクラツデオ殿には、戀の病に御罹りなされました、然らば何處の婦人を見初めた——これは閣下から御尋ねのない中は申されぬが——其答は極々手短か——誰あらうレオナト殿の丈低娘へロー殿。

クラ 果してそれが眞實なら、何を隠さう其通りに申上げます。

ベテ イヤ昔嘶の文句にかういふのがムる、大切の秘事を託かれた苦し紛れに、其様な事はない、其様な事はなかつた、南無主よ其様な事をあらせ給ふな。

クラ イヤ程なく心變り致さば知らず、さもなくば、南無主よこれに相違あらせ給ふな。

ベド 如是々々、果して貴殿が彼の君を御慕ひなさらば——彼君は天晴な淑女でムる。

クラ イヤ某に白状させうと思つて、其様な事を仰せらるゝ。

ベド 眞正某は、某の心中を其儘申すのでムる。

クラ 某も眞實、心中を其儘申したのでムる。

ベテ 某も眞正眞實、心中を其儘申したのでムる。

クラ いかにも彼女が、慕はしい様な心地は致します。

ベド 某は彼君が淑女たる事を承知致す。

ベテ 某は彼女が慕はしいやうな心地も致さず、又淑女たることを承知も致さぬ、これは、火も溶かす可からざる某の意見でムる、此意見故ならば、炮烙にも逢ひませう。

ヘド ほんに貴殿は宗旨違ひ、女人禁制でムつたな。

クラ 但し我慢驕慢で推透すばかり、歴とした筋道は立つて居らぬ。

ベチ 我を生みしは女なれば、其儀は女に禮を申す、我を養ひ育てしも女なれば、其儀も只管女に禮を申す、乍去此額の上に麗々と角を生やし、又は生やした角を人目に觸れぬやう、隠し立など致すは眞つ平御免でムる。イヤ女に疑を懸けるは、所詮女を辱めるものでムれば、某は初めより女を信じませぬ。さてつまる所某は一生獨身で終る覺悟でムる、そして畢竟其方が氣樂でムる。

ヘド さうは云はるゝが、某の眼の玉の黒い中、一度は貴殿が戀に焦がれた青ざめ顔を、拜見致す折もあらう。

ベチ イヤ病に責められ、饑に迫られ、さらば業の煮ゆる事などがあら

ば知らず、戀故青ざめる事はムるまい。よしや戀故某の血の氣が減るとても、一杯の酒で直様恢復はつきます。それも成らぬやうな事がムらば、此眼を戀歌師の鐵筆で抉つて、盲目に致し、戀神の看板に女郎屋の入口へ御釣しあれ。

ヘド 宜しい、其御宗旨に背かれたなら、貴殿はいかい物笑の種となりませうぞ。

ベチ 若し背きましたなら、此某を猫の様に、樽の中へ詰め込んで、遠くから弓で射させ、射當てた者をやんやと賞め、名人くと御稱へなされて御樂みなされうとも、露御恨みには存じますまい。(猫か樽の中へ入れし習とぞり)

ヘド 時經つ中には判ることぢや。

「詩經れば、荒ぶる牛も軛にぞ、

いつとはなしに繋がる。」

と申してムる

ベチ 荒ぶる牛は繋がれも致さうが、此ベチヂツクが繋がれたなら、其牛の角を引抜いて、此の額に御差しなされ、そして某が肖像を看板に書かせて、其下へ「貸馬あり」の張札の様な太文字で、これこそはベチヂツク、女房持つた顔を見よ」と記して、諸人に御見せなされませい。

クラ 若し其様な事がムつたなら、それこそ貴殿は荒ぶる牛と、嘸狂ひ廻らるゝ事でムらう。

ハド 荷にも戀神が、箆の矢をエニス（エニスは當時歐羅巴中第一の淫靡の地、従つて戀神の矢も多の市で（エニスは残（これは彼處に費さる意）りなく費ひ棄てざる以上は、何れ其中戀故に、貴殿

の身がわななき戦ふ事もムらう。

ベチ 然らば其時、地震でもあると見えまするな。

ハド ハテ永い中には、其頑固（たゞと）が和らぎまするわ。それはさてあきベチヂツク殿、貴殿は何卒レオナト殿の許へ御出あつて、此某は今夜の御招宴に屹度列なるやう申して下され。イヤ中々盛なる準備を致されてとムる。

ベチ 身に餘る大役を仰せ付られ、冥加至極左らば御暇申す、何卒御機嫌克（う）う——

クラ 御消光の程乍蔭祈居候、恐惶謹言、自宅にて——若し自宅あらば——
——（これは前のベチの白の終りに「何卒御機嫌克う」とあるが、何となく當時の書翰文の結末に似たりしかば、それを受けて「御消光の程云云」と續けたるなり。後のハドの自亦更に）
之を受け續けたるなり）

ヘド 七月六日、辱交ベテデックより。

ベテ 御なぶりあるなく、貴殿の御話は何時も何やかやの引證ひきていで補綴つづ合せてムるが、其癖くせちぐはぐの御取合せばかり。以來は山緒やまぐすある故事來歴らいれき（舊翰文の結末の）などを引出して、御嘲弄おぼろなされう時には、先づ御自分の御心を顧みられるが宜うムる。先づ〜某はかう参ります。

とベテ退場

クラ さて閣下、今こそ貴君あなたの御助力が願はしうムります。

ヘド 委細御打明けなされ、然らば如何なる難事がたにても、早速某が御助力申さう。とかく貴殿が某を御信用ごちゆうあるだけ、乍不肖御役に立ちませう。

クラ レオナト殿には、御子息を御持ちなされてムりますか。

ヘド 子と申しては、ヘロー殿ばかり、ヘロー殿が唯一の嫡子ちやくしでムるが、何

と御思召がムるとな。

クラ 如何にも閣下、貴君あなたの御供を致して、此度こんど落着致した、彼の戦争への出陣の砌まへ、此家こゝへ立寄りました節には、彼女かみを見る某の眼は、之より戦場に馳せ参ぜんず、武人の眼、愛いとしの乙女よとは見るものから、大役を控ゆる身の戀と申す迄には、思ひ込みも致しませなんだに、此度こんどの凱旋には、自然戦場と申す屈托は消え失せ、其代りに群がり來る煩惱の犬、此某を驅つて、ヘロー殿の美しき儂なまけにあこがれしめ、さて五月蠅いばらく責めまするやうは、出陣の以前より、思ひそめたる彼君なるを――

ヘド （なまげ返し）御詞の中ながら戀する者の常と致して、御立派いはれな由來ゆらい因縁いんねん少々聽き者は閉口へいこう々々。

此時ボウチナ（下の家來）登場但し片隣に潜みて此話を立聞き居る

ナニサ、ヘロー殿を御見初めなされたなら、幾らでも御慕ひあれ。然らば某より、此趣をヘロー殿にも、父親レオナト殿にも御話し申し、そして彼君を晴れて貴殿の持物と御取持ち致しませう。只今御始めなされた、廻り遠い風流談は、即ち此思召てムらうが。

クラ 道がは戀知りの嬉しい御心入、顔色を見ればかりて、戀の惱みを御察しある。乍去餘りに輕卒なる懸想三昧と、御さげすみも心苦しうムれば、も少し申開きが致したい。

ペド イヤサ、橋は川幅よりも廣う致すには及ばぬ。差當り致すべき事を致して進ぜれば此上はムるまい。間に合ふ仕事は折に合ひたる仕事でムる。貴殿が一生に一度の戀をなされた、其處で某が相應はしい始末をつけて進ぜる。即ち今夜の宴席に於て、某は何ぞの假面を被り、貴

殿に代つて、ヘロー殿に向ひ、我こそクラウチヲよと假名を遣ひ、胸の思ひを打明けて、戀慕の情を濃やかに物語り、散々に彼女が心を動かしたる上、後に彼女が父レオナトに逢ひて委細を打明け、さてこそ結局ヘロー殿は、貴殿が掌中の物と致して進ぜう。ハテ然らば早速計畧を廻らさうではムらぬか。

と二人退場

第二場——レオナト家の一室

レオナト、アントニオ(前者の)別々に退場

レオ ヤア弟、御身が悴は何處にぢや、囃物の用意を致したか。

アン 只今其用意中でムります、それはさうと兄上、不思議な噂がムリま

す、大方兄上にはまだ夢にも御存じあるまい。

レオ それはよい噺か。

アン よい悪いは後を見ねば判りませぬ、乍去打見はよささうな皮を被つて居ります、外観は如何にもよささうに見えます。即ちペドロ公、クラウヂヲ伯の兩人が園内にて、青葉隠れの小逕を辿りながら、このやうな對談を致し居る處を、某の家來共がふと漏聞致したと申します。と申すは彼の公が、クラウヂヲ伯に向ひ、ヘロー殿を戀ひ慕はるゝ由を語り、さて今夜の舞踊會に於て、此趣をヘロー殿に打明け、若しヘロー殿に於て否とさへ申されずば、折を外さず早速貴方に申し談ずると、申されたげにムります。

レオ して、此事を御身に注進の致した者は、確かな者でムるか。

アン 至って倣倣い奴でムりますが、此處へ呼びませう程に、御口づから御聞糺しなされませ。

レオ イヤ、其事の眞實と成つて現れうする迄は、たゞ夢と致して置かう、乍去大方此は眞てムらう程に、先づ女にも話しておいて、いざといふ時の返答に詰らぬ様に致させたい。就ては御身が參つて彼女にそと此事を告げては呉りやるまいか（ア、これにてアンの子息、樂人を連れて歸つての子息に向ひ）コレ、其方にぬかりはあるまいな——（樂人の長におゝ免せよ、一緒に參らう、御身が助力を受けねばならぬ——（又アンの向）多忙い今夜の事、萬端そなたの注意を頼んだぞよ。

と退場

第三場——レオナト家の他の一室

ドン・ジョコン及びコンラド(前者が庭登場 心の家來)

コン 阿呆らしや御前何故其様に、度拍子もなく鬱いてばかり入らせれまする。

ジョ 見るもの聞くものが、度拍子もなく癪に障る程に、限もなく鬱陶し
さわら。

コン 然らば少々私の申上げる事を御聞下されませ。

ジョ それを聞いたら何の様な利益があらうぞ。

コン 即座に御機嫌が御治りなされぬ迄も、御勘忍が成り易う成りな
されませす。

ジョ ハテけしからぬ、豫々其方自らも申す如く、土星の下で生れたとあつて、意地くね悪き其方が、人の惱みを治さうとての説法立は笑止千萬、身共は包み隠しの成らぬ性分、儻ぐ仔細の有る時は儻ぐばかり、おかしとも思はぬ、人の冗談に作り笑も致されず、食ひたい時は一人て食ひ、人を待合せなども致さず、眠い時にはさ々と寝て、人の仕事の手傳などは致して居ぬ、又おかしい時は勝手に笑ひ、人の不機嫌などに遠慮は致さぬ。

コン 去りながら、誰に遠慮のない御身分とならせられる迄は、其様に有の儘を御見せなされては成りませぬ。遂此程迄御不和でござつた御兄君と、漸う御和解なされたばかり、御兄君の御機嫌に御前の御機嫌をお合せなさらぬば、其御和解とても長持は致しますまい。御前の御

心から問を合せて、長閑の月日を御過ごしなさらねば、御目的の收穫はムリですまい。

ツヨ イヤ身共は、兄者の機嫌に合せて咲く、薔薇の花とならうよりも、荆に交る野薔薇の花で過ごしたい。身の舉動を時世に合せて、一人に可愛がられうより、氣儘に振舞うて萬人に憎まるゝが此身の願ひ。さすれば外観を繕ふ善人とは申されず、執拗者よと囃されうと、街氣のなゝい正直者でないとは誰が云はうぞ。どうで口には辯、足には鎖を懸けて、伺ひ置かれる程、御信用めてたい此身共ぢや。籠の鳥同然、囁つて聞かせぬと極めたわ。若し此辯がなくば、咬みもせう、此鎖がなくば何を致すか判るまい。先づく、此處の處構うて呉りやるな、棄てゝおきやれ。

コン ハテ御前は、其御不満を御利用なされて、何ぞ爲さらうとは遊ばしませぬか。

シヨ 用ひるの段ではない、身共はたゞ其不満ばかりぢや。——ヤア誰か参った様子。

ホラチナ登場

あゝホラチナ、何事ぢや。

ホラ 私は彼方の御宴席を見て参りましたが、レオナト奴が御兄君公爵を御待遇の大宴会、イヤそれはさて置き、縁結びの目論見といふ、珍間を御耳に入れませう。

シヨ 何ぞ悪戯の種になりさうか、でも自ら求めて嫉妬の種を蒔く痴者は何者ぢや。

ボウ 誰あらう御兄君の、右腕と御頼みある、

ジロ 誰ぢや彼の優男やうなんのクラウヂヲか。

ボウ 其通りてムりまする。

ジロ 恐かな奴ぢや、そして誰が——誰が——イヤサ何女なんめに目を付けたな。

ボウ レオナトの跡取娘へロー殿。

ジロ まだ若いに氣早な奴ぢや、して其方は何うしてそれを。

ボウ 掃除役を頼まれて、座敷の拭掃除ぬぐいを致し居ります處へ、公爵とクラウヂヲ殿とが手に手を取って、何か真面目な相談を致しながら参りますゆゑ、私はそと壁掛の後へ潜んで聞きますれば、公爵が御手づからへロー殿を口説落し、手に入れた上、クラウヂヲ伯へ差上るとの相談

てムりました。

ジロ よい事を聞いたぞ、コリヤ何うやら鬱憤うづの漏らし處になりさうな。身共がかう兄者の不興ふこうを蒙かぶつたも、彼の成上者なりあがりもの奴が訴訟故、彼奴を何うにか翹たかつて呉れれば、何の道身共は満足致す、其方は何と、確かり身共に助太刀致すか。

コン 何處迄も致しませいで。

ジロ 先づこれから大宴會おほいごの席へ参らう、萎れ返つた身共の顔は、彼等にはよい御馳走ぢや、イヤ此様な時料理人が、身共と同類どうるいであつたなら、彼奴等を生かしては置おくまいもの——何うしてよいか、往いつて熟じやくと相談せう、何うぢや。

ボウ 何處いづ迄も御意に従したがひませう。

と一同退場

第二幕

第一場——レオナト家の書院(假裝舞)

レオナト、アントニオ、ヘロー、ビートルリス及び従者等登場

レオ ドン・ジョンの伯爵には、宴席へ御出がなかつた様ぢやな、

アン とうく御見懸け申しませぬ。

ピ 彼の君には、何時も苦い顔ばかり、妾は彼の御顔を見る度に、後小一時も胸持が悪うムります。

ヘロ ぼんに沈み切つた御性質

ピ 彼の伯爵とベテデック殿と半々にこねませたら、丁度程の宜い殿御

が出来ませうに、一人は偶人の様に年中沈黙、一人は甘やかして育てられた若様の様に、誰憚らず喋り続け。

レオ 然らばジョンの君の口へ、ベテデック殿の舌を半分入替へ、ベテデック殿の顔へ、ジョンの君の苦味を半分——

ピ そして形状のよい脚と足首を付けて(當時男子の服装は下股の形状、丸出し故、脚及び足首の形状の要なる一資格なり)財布にはずしりお貨幣を持たせたなら、マ、こんな殿御なら、どのやうな女子でも、それこそ、ろりてムりませう——女子を靡ける心さへあるならば。

レオ ハテサテ其許のやうに口が悪うては、中々夫は有てまいぞや。

アン ほんに餘り意地が悪過ぎる様ぢや。

ピ 意地悪も過れば尋常の意地悪には優ります。諺にも意地悪牛に、神

は短かい角を給ぶと申します。なりや意地悪の過た牛には何のやうな角も給はりますまい。お蔭で神様に御手敷を懸けずに済みます。レオ それ／＼その通り、悪過ぢやに依て、神は何のやうな角をも、其許には賜はるまい。

ピ 如何にも其通り、神様は妾に夫を賜はりますまい、妾にはそれが却て何寄、朝夕の御祈禱にも、只管そればかりを願つて居ります。鬚の生えた夫などは眞平でムります、寧ろ直接に毛布に包まつて寝る方が、まだごそ／＼致しますまい。

レオ そりや鬚のない夫に、廻り合せぬとも申されぬ。

ピ 鬚の無い男を何う致しませう、妾の衣裳を着せて腰元に遣ひませうか、總躰鬚のある男なりや、若衆をとうに通り越し、又鬚のない男な

りや、まだ大人には程がムります。若衆を通り越した男なら、妾には向きませぬ、それかと申して、まだ大人に程のある男には、此妾が向きませぬ。それ故妾は彼世では寧ろ猿引に雇はれ、六十文の賃錢で、猿を地獄へ引く身にならう考へてムります。(一) 一生獨身にて過さむとなり、獨身にて猿引に雇はれ云の傳説ありたり)

レオ そんなら其許は地獄へ行く氣か。

ピ イヤ地獄の門まで参ります、其處迄参れば、何やらの様に角の生えた鬼が出て、いかにピートリースいそげとこそ、天國へいそげ／＼、知らずや此處は、處女を置くべき場所ならずと申します、そこで妾も引いて参つた猿を渡し、それから天國の關守、セント・ピーター方へ参ります。さすればピーターの案内で、獨身者の居場處を尋ねて住家を求め、

長閑な月日をおもしろおかしく送ります。

アン (へ口に) 其許は又、父君次第であらうな。

ビ 其通りてムりますとも、父君の前へ恭しく三指で、父上様、貴君の御意にさへ叶ひますればと仰有るでムりませう——とは申すもの、へロー様、成るべく美しい殿御になされませ、さもなくば、も一三指を突いてかう仰有りませ、父上様、妾の御意にさへ叶ひますれば、

レオ イヤ、ビートルリス、いづどは其許にも、夫を持たせて見たいものぢやな。

ビ 神様が男と申すものを、土で作る中はなりませぬ、塵土の一片に自由になれ、我儘な粘土の権化に一生を托せるとは、女の身に悲しい事ではムりませぬか。イヤ、叔父君、妾は夫は持ちませぬ、そして同じ

アダムの子孫なりや、世間の男は、皆んな妾の同胞同然、同じ血統の同胞で、縁組沙汰は罪でムりませう。

レオ (へ口に) 時に娘、其許は先刻父が告げたことを忘れまいぞ、公爵が其様に其許に當つたら、其時の返事は心得て居やうな。

ビ 音楽入りの口説はお珍らしい若し、好い拍子に口説かれななら、それは音楽の罪でムりませうぞ、若し又公爵が、餘りしつこく口説いたなら、物には程があるといふとを知らせる爲め、舞踊の歩調で御返事をなされませ。イヤ、申しへロー様、戀の後先を譬ふれば、舞踊の様でムりますな、初手の口説は蘇國風の早舞、急かる、様な大熱々で嬉し耻かしの骨頂中の祝言は、華美な耀歌、振壯殿で立派で古代めいた。終の後悔は、楛子を降る様なトン、拍子、こけつまるびつ留度もな

く、老の阪を慕へと、ころくく。

レオ よう眼先が見えることぢやな、

ピ― 伯父上様、妾は至って眼性が宜しうムります。晝日中御寺の屋根を見
分けることが出来ます。

レオ イヤ弟、假裝者共が参る様子、通り路を開けたく

とド、レオ、ペトロ、クラウザツ、ベテガツク、バルセイサア、ドン・ジ・ロン、

ボラチナ、マーガレット、(侍女) (ヘルスラ) (全) 其他大勢假裝して登場

ペド (前へ進み) 某は貴嬢の戀人、御一緒に歩行させませう (戀人に擬して自ら

ふくい)

ヘロ その怖い眼で(假面)御睨みなさらず、そして何も云はずに、静に御歩
行きなされうとなら、いかにも早速に参りませう、決して御辭退は致

しませぬ、取別け舞踊の果てた時は(舞踊果てれば男と手を別ち去る、其
也んと)
ペト アノそれは、某を御連れなされて(ヘロ、は男と手を別ち一人にして去

ふにい)

ヘロ イヤ只今は其様な事は申しませぬ、

ペト 然らば何時其様な事を仰せられます。

ヘロ ホ、貴君の御顔が、妾の氣に叶ひました時、乍去袋の様に中味の笛
も醜うはムりますまいな(汝の顔は其假面の如)

ペド 某の假面はフクレモンの小舎と申す者で、中にはジョブ神がござら
します(シロブ神微服してフネリシア園を遊行する時一夜の宿を乞へど

葉井小屋を訪れ、歌待せられたりといふ物語より、即ち外観は好も)
しからざる假面なれど中にはジョブ神の如き立派な顔ありとの意)

ヘロ そんなら貴君の其假面は、藁葺小屋でムリますな。
ペト イヤ戀物語はこれ密かに。

とペド、ヘロを隅の方へ引張り行く、入替リバルセイサア、

マーガレットの一組進み来る

バル (マーガレット) コレ少とは某を可愛がって呉れても宜ささうなものぢや。

マツトガ イヤ可愛がって進げぬが汝の爲め、此妾には、悪い持前がありますぞ。

バル それはどの様な持前ぢや。

マー 御祈禱を奉げる時、高い聲を出しますぞい。

バル それは益すうれしい、聞く者共が屹度如是と唱へやう。

マー そんなら遠慮なく御祈禱を申して見やう、あゝ神よ、何卒今夜、妾の相手に舞踊の上手を御授け下され。

バル 如是。

マー 又舞踊果てし後は、其者を又と妾の眼に觸れぬ處へ、早速御遠ざけ下さるやう——サア——如是と云はせられい。

バル イヤもうく、何も云はぬ、これは散々な目に遇うた。

と二人共他の假裝者の群に混り去る、入替リケルスラ、

アントニオの一組進み出る

ケルス (アントニオ) コレ申し、妾は御前を存じて居ります、アントニオ様でムリませう。

アン 手短かに申すがそれは違つた。

ウ　御頭の振り様で、御前と拜見致しました。

ア　實を申せば、身共は彼君の身振を致して居るのぢや。

ウ　イヤ／＼眞物でなうて何うして其様に似せられませう。それ其御手附からが正物々々、アントニオの御前に相違はムりませぬ。

ア　實の處それは勘違ひぢや。

ウ　ハテマア、其の程のよい御人柄で、御前といふ事に氣が付かぬと思召すか、争はれぬは御人品、何のえな、御前に相違ムりませぬ、隠しても現れる御優稚さ、もうそれて判って居りますわいな。

と兩人共舞臺の後の方へ退く、入り替りベテサック、ビートリースの一組進み出る

リ　ビートリース　(ベテサックを道ひながら前方に進み出て)今の其御話は、誰が申したか仰有って下さりませ。

せ。

ベ　イヤ／＼それは御免下さい。

ビ　そんなら、さういふ貴君は何誰様か、仰有って下さりませ。

ベ　今此場ではどうも。

ビ　此妾は旋毛曲りて、云ふ事は皆な道化艸紙の剽竊ぢやなど、申したとは——其様な事を申したは、大方ベテサック殿でムりませう。

ベ　ベテサック殿とは如何なる仁で。

ビ　よう御存じて居らせられませうに。

ベ　イヤ實以て某は存じませぬ。

ビ　そんなら貴君は、彼の御方に笑はせられた事はムりませぬか。

ベ　何卒如何なる仁か御教へ下され。

ヘチ さればてムります、先づ公符ペドロ様の辨問、但し至って鈍な方で、たゞあられもない誹謗を云觸らす、が能てムります、それ故輕薄な若者ならては、相手に致す者もムりませぬ、尤もそれとても、彼の人の身の才を賞てるでもない、誹謗を申す其癖心をおもしろがる故、されば氣に入られてばかりも居ず、終は怒りをも買ひます、先づ初めには笑はせて、後には打たれるが日頃の習、大方今夜も此宴席の中に居る事でムりませうが、此妾に物云ひ懸けたら、目に物見せうと待つて居ります。

ヘチ 自然其御方と御知己になりましたら、其御言葉を其通りに申しませどへ。

ビ 御勝手に仰せられませ、多分其の返報に、何ぞ妾の嘲弄を申しませ

う但しその嘲弄は大方ヤンヤと受けもせず、笑ふ者もムりますまい。處で忽ち辭ぎ出し、差當り其晩は、夜食も碌々喉を通らず、お蔭で鴨鵝の腕肉(當時腕肉は此鳥の尤も美)が、一皿助かると申すもの(時に奥にて)サア、舞踊が始まります、音頭取の指圖は受けいではなりません。

ヘチ とかく善い事なら何事でも。

ビ 若し又悪い方へ音頭を取られたなら、手早く逃げて參るばかり。

と舞踊あり、後ドン・ジロン、ボワチナ及びクラウザサの外一同退場

シロ いかにも兄上には、ヘロー殿に執心と見えた、して只今は彼女が父親レオットと、それに就き談合せむともあらう、彼方へ伴ひ參りし様子、又婦人達も彼女に従いて退出致し、残るは假面が只一つ。

ホウ 彼の假面こそはクラウデヲ、素振で判断がつきます。

ジヨ (クラウの側へ行きわ) モシ、貴殿はベテチック殿ではムらぬか。

クラ よく某を御見知なさるゝ、如何にも左様でムります。

ジヨ 貴殿は定めて、愚兄が色戀などにも、御携はりなさるてムらうが、愚兄は此程ヘロー殿に執心の様子でムる。何卒思ひ諦める様に、貴殿より御勸め下され。家門の上より不釣合の縁邊でムる、親友のよしみを御盡し下さるは、此様な時を措いてはムるまい。

クラ して御兄人が、彼女に執心とは、如何にして御察しなされました。

ジヨ 自ら誓文立て、左様に申し居る(ヘローに)を聞付けました。

ホウ 某も御同様聞付けました、して又今夜の中に、祝言を済まして置かうと、是亦誓文で申さるゝを聞取りました。

ジロ イザ先づ夜食の席へ参らうではないか。

とドン・ジロン、及びボラチナ退場

クラ さてベテチックの振にてからは、挨拶致したが、此凶報はクラウデヲの耳で聞届けた。いかにも此れは確實であらう。——公爵には我物にせうとの下心、朋輩の情誼とても戀にばかりは頼まれぬ、なりや誰とても戀に懸けては、己が舌で意を通じ、己が眼で情を通はせ、人頼みには任せぬ等。とかく美女と申すは、人の心を迷はす魔、一度其魔にさされたら、如何な信誼も、變じて邪淫の鬼となるは、日夜見聞致すことぢやに、それを思はず、人手に任せたは、我身の不覺え、さらばこれにてヘロー殿、思ひ切らねばならぬ事か。

ベテチック登場

ベテ 其處に居らるゝはクラウヂラ伯にては。

クラ いかにも御察し通り。

ベテ 然らばコレ、某と御同道あれ。

クラ それは何處へ。

ベテ ハテ貴殿の御身の上に就き、柳の木を尋ねやうではムらぬか。さて

尋ね當てたら、如何やうな花輪を作りませう。(柳は矢戀の徴象なり、故に戀に矢敗したる者は柳の

枝にて輪を作り身に纏ふといふ) 富豪が頸輪の様に頸へ懸けらるゝか、(沙翁劇中には折々此故事あり)

それとも副將の肩章の様に、肩から脇へ纏はれますか、とにも角にも、

どのやうにか纏はれずばなりませんまい。何故と申せ、公爵が貴殿の戀

人、へロー殿を御手に入れましたわ。

クラ ウム何卒首尾克く御手に入れて下されば宜し。

ベテ 何と伯樂が手に合はぬ牡牛を賣付けける時の様な事を仰せらるゝ。

乍去眞實の處貴殿には、公爵が貴殿に此様な愛目を見せうとは、夢に

も思ひ設けぬ事でムたらうが。

クラ イヤ何卒彼方へ往んで下され。

ベテ ヤレ、貴殿は御伽噺の盲人の様ぢや、手に持つ菓子こどもを小兒に盜

まれ、怒って柱を打たるゝわ。

クラ 貴殿が往んで下さらずば、某が往にまする。

とクラ退場

ベテ さて、いとしばや逸矢とやに當つた鴨と申す見得みえで、眞菰まごもの根本へ這

込むく——イヤ他人事ひとごとはさて置き、彼のピートルス嬢が某と知り

ながら、知らぬ振を致すらしい先刻さきげんの仕打、想へば悪い仕打ぢや——

何ぢや公爵の幫間ぢや。——げに某は何時も冗談ばかり云ひ居るに依つて眞實人は其様に申すやも知れぬ。——イヤ滅多に此様な噂に惑さるゝは自ら輕しめると申すもの、ナニ人が其様な事を申すもので、自分の説を世間の説に致して、某を幫間など、申すとは、これも畢竟彼の姫がさもしい曲つた心の業。よし／＼某も何ぞ此復讐を致して呉れうず。

ド・ペドロ 登場

ヘド 伯爵は何處に居らるゝな、貴殿御見懸はなさらぬか。

ペテ 何を隠し申しませう、某は最早伯爵に、閣下の御噂を致しました、瓜島の番小屋といふ見得て、一人悄然と此處に立って居られました故、公爵には、既に此處の姫君を御手に入れし由を告げましたが、よもや

間違ではムリますまいな、そして某が、柳の木のある處へ案内致さう、棄てられたしるしに、其枝で花輪を作るとも、さては我身を打つ爲めに、鞭を作るとも、せられませいと申して進ぜました。

ヘド 我身を打つ爲めとは、何ぞ落度ばしムったか。

ペテ 如何にも、寺小屋通ひの手習兒が、小鳥の巢を見附けた嬉しまぎれ、朋輩に見せびらかしたばかりに、盗まれた愚かしさは、落度ではムるまいか。

ヘド 見せびらかしたは、畢竟朋輩を信ずる故、貴殿はそれを落度と云はしやるか、落度は盗人にあらう。

ペテ 乍去、鞭を作って間違はムらぬ花輪とても其通り、何故と申せ、花輪は盗まれた自分で着けます、鞭は盗んだ貴殿を打ちます。ハテ貴殿

伯爵の巢鳥を盗まれたではムらぬか。

ベド 某は只だ其巢鳥に歌を仕込み、愈よの時、見付主に還す所存でムる。

ベチ 呆して歌を仕込んだばかり、無疵で御還しなされたなら、それこそ貴殿は、正直者で入らせらるゝ。

ベド それはさうと彼のビートルス嬢には、貴殿をいから恨んで居られます、先刻一緒に踊つた男が、何か貴殿が嬢の悪口致した由を告口致したげにムる。

ベチ イヤ彼君こそ如何なる木石でも忍ぶに忍ばれぬ程、此某の讒訴を申されました。如何な檜の枯木でも、たつた一枝なりと青い葉がムたら、彼の讒訴を黙って聞いては居られますまい。某の假面さへ活躍出し、無理屈云出しさうに致しました。御聞き下され、某が某ぢやとは氣も付

かずか、ベチヂックこそは、公爵の幫間で、其癖霜融のする曇天よりも、鈍よりとした男ぢやなど、申した上、廻れば廻るものかな、宛ら此某は、萬人の矢表に的に立てられたやうに、嘲弄讒訴の毒矢にて、全身隙間もなう射抜かれました。げに彼君が言葉は劍か太刀か、一言一句刺します。彼君の吐く息に、若し彼の言葉のやうな毒がムたら、近づく者は皆な命がムりますまい、イヤサ世界の果北極星の邊までも、彼の毒で吹き抜かずには措きますまい。彼の様な婦人には、たとひ先祖のアダムが、神罰を蒙らぬ前の様な美しさ、神々しさを持たせうと、女房には持ちたうない。イヤ彼の様な婦人は、亭主に持たらハ、キユレス(有名な希人)にても、金串を廻させたり(肉を差し廻轉し)、又は焼く火を起す爲めに、例の棍棒(常川の武器)まで割って、薪料にもさせ兼ねまい。イヤ

彼の婦人の話は中止々々彼女が美き衣着たアテイの女神でムる(デアイの女神とはホーイマ)某は何卒左る陰陽師に頼んで彼女を調伏致したいと存じまする彼女が此世に在る間は、此世は混沌、寧ろ地獄へ参ればお寺へ参つたやうにも、と安穩に過ごせまする。ぢやに依つて、此世の人々、早く地獄へ参らうと存じ、わざと罪咎を犯しまする、イヤ眞實彼女彼女の居りまする處には、駭々しさ、恐ろしさ、物凄さが従き纏ひまする。

ヘド 御覽あれ、さういふ彼女が参る。

ベテ イヤ申し閣下には、何ぞ某を、世界の果へ遣す御用事はムりませぬか。某に御命じ下されう御案じがあらば、常世(とこよ)の國迄も参ります、亞細亞の果へ、小楊子を取りにも参りませう(小楊子は東洋特有のものなりしなり)凡人の近づき難しと申しまする、天笠王の足の尺でも取つて参りませう、それと

も韃靼王の顛鬚を、一本抜いて参りませうか、さては音に聞く小人國へ、何ぞ御用はムりませぬか。如何なる御用を仰付けられうと、此夜又女と一言口をさくには優りまする。ハテ何ぞ御用はムらぬか。

ヘド 何もムらぬ、只だから此處に居て下されい。

とクラウツヤチ、ピートリス、ヘロー及ビレオナト登場

ベテ ヤレ、大嫌(おおい)ひの御馳走が参つた、某は殊に舌の御馳走は眞平でムる。

とベテ退場

ヘド さて、ピートリス殿、こなたはいかうベテデック殿の歡心を失はれましたな。

ピー 實に、彼君には歡心とやら申す御心を暫らく此妾に御貸置下

されましたに依て、妾に於ても、妾の心と申す利息を差上げて置きま
した。それ故彼君の御心は、元利合せて二心よたこころ曖昧な御心がムる筈、然る
にかう妾の心を利息と致して差上げましたは、實は彼君が妾を欺瞞たぶら
して、かたり取つたも同様でムります故、彼御心の中の半分は、いかに
も妾が失ひましたものでムります。

ヘド 兎角こなたは、ベテヂック殿を見事に取って投げられた。

ピ一 ホ、妾が投げられたら一大事——それはそうと御依頼の通り、ク
ラウヂヲ殿を御連れ申しました。

ヘド 忝ない——コレ伯爵、何故其様に憚おこいてムる。

クラ 憚おこいでは居りませぬ。

ヘド 然らば如何致された、御不快か。

ケウ 不快でもムらぬ。

ピ一 ナニ伯爵には御憚おこぎでも、御病氣でもムりませぬ、それかと申して
御嬉しさうにも御快おこさうにも見えませぬ。程のよい蜜柑と申すもの
で、酸すいと甘いあまの真ま中ちゆう、そして何なんうやら其蜜柑の、嫉妬深い色あひて入
らせらる（嫉妬の色は嫉）

ヘド 實まことに、其御説の通りでムらう。尤も果して其通りなら、伯爵には
御勘違ひを爲される。——モシ、クラウヂヲ殿、某は足下に代かつて戀を致
して、ヘロー殿を手に入れましたぞ。父御にも仔細を打明け、御同意を
得えましてムる。此上は祝言の日を、貴殿御取極めなされい、然らば天與
の歡樂は、懸かつて貴殿の御身上に落つるでムらう。

レオ 申し伯爵、不束ながら娘を御受け下され、娘と共に某が財産一切を

なされてゝはムりませぬか。其御兄弟の御一人に、若し妾の様な不束者でも添はれる事なら、ほんに御前の父御様こそ、善い御婚様を御拵らへ置き下されました。

ヘド いつそ手早くかく申す某ては如何でムる。

ビ一 さればでムります。御前を外處行に致して、外に日常用ゐるのを御世話下されば、それでも宜しうムりますが、日常用には御前は餘り勿体なさ過ぎます故、先づ御免を蒙りませう。——イヤ此様な事を申して、眞平御免下されませ、妾はこれが生れつき、輕口ばかり實のない事を申します。

ヘド イヤ和女の沈黙こそ、一番某に不快でムる、和女には御輕口が何寄似合ひます。申す迄もなく和女は餘程楽しい月日に、御生れなされた

のでムらう。

ビ一 御前それは大違ひでムります。妾の生れます節、母は泣いたと申す。(西洋の女は分嫉の際泣くを)但し其時、天上のさる星が舞踏を躍(常とす、故に此しやれあり)て、其下で妾が生れたさうにムります。——さらば從兄弟の君達、御睦まじう(と去らむ)

レオ コリヤ、其許は先刻、身共が申して置いた事を忘れてたもるな。

ビ一 心得ました、そんなら叔父上、御免下され御前様。

とビ一退場

ヘド げにわつざりと致した御氣性の婦人てムる。

レオ 彼女には物思ひと申すことが少しもムりませぬ。夢の中にての外、悲しげな様子を致した事はムりませぬ、それとても終りまで、悲しげ

ては居りませぬ娘の申しまするに、彼女が何か快からぬ夢を見ますると、屹度笑つて目を覺ますげにムります。

ヘド それで居ながら、婿君の話を持懸けると、席にさへ堪へられぬ。

レオ その段ではムりませぬ、云寄る者がムりますと、罵詈雑言で、散々の體に逢はせまする。

ヘド 彼の君をベチヂック殿に取合せたなら、定めて無類の嫁御寮てムらう。

レオ それこそ、七日も経つ中には、雙方喋り高じて、定めて發狂致しませう。

ヘド さてクラウヂア殿には何日式を擧げられますな。

クラウ 明日にでも致しませうか、式を済まして、愈よ大願の成就致さぬ中

はいやもう時の經つのが待遠にムります。

レオ イヤ婿殿、此月曜日てなうては叶ひますまい。今日から丁度七日ムるが、それでも、某の満足致すやうに、仕度を致すには短か過ぎる位てムる。

ヘド (クラウに) バ、ア貴殿は首を掉られる、待遠しうムるな。乍去クラウヂア殿、此中間を退屈致さずに過ごす工夫がムる。乃ち某は、此間に一大難事を、たくらみます。と申すは、外でもない。ベチヂック殿とピートリス嬢を、互に思ひ思はせて、有頂天迄登り詰めさせうとの一事でムる。某は何うぞ致して彼の二人を取合せて見たい。此處に御在のお三人が、某の差圖に従ひ、御助力下されうならば、此事成就疑なしてムる。
レオ それは御助力致しませう。たとひ十日眠ないでも宜しうムる。

クラ 某も其通りでムる。

ヘド 和女とても御異存は、へロー殿いかゞてムる。

ヘロ ビートリース殿に、善い殿御を持たせうとの事ならば、不束な妾に、相當の御手傳は致しませう。

ヘト イヤ、ベチデック殿は、某の存ずる處、殿御に持つて決して悪い人ではムらぬ。先づこれだけは某も保證申す、即ち家格はやんごとなく、勇氣は人に超え、名譽は隠れもなき仁てムる。——さてへロー殿、從妹の君とベチデック殿を戀中に落すには、彼の君に對し、如何致して宜しいか、其邊を御教へ申しませう。——又ベチデック殿に對しては、御兩所の御助力を以て、彼が敏慧と怜悯とを以てしても、ビートリース殿を慕はずには居られぬやうに計らひます。さて首尾克く參らば戀神も最早弓

矢の達人とは申されぬ、彼神が從來の名譽は、やがて我等の有てムる。我等こそ唯一の戀の神でムるものを、先づ——某に從いて御出でなされい、某が秘術を精しく御話申しませう。

と一同退場

第二場——レオナト家館の前

ドン・ジョン、及びボラチチ登場

シヨ 其通り、クラウデヲの伯めが、レオナトの娘と縁組致す。

ボラ 乍去御前、それは邪魔を入れて遣します。

シヨ 邪魔悪戯とあらば、どの様な事なりとも、悉く身共には良薬ぢや、身共は彼奴故にとかく溜飲が下り兼ねぬ、彼奴が願望を挫いて遣すは

身共に取り好い慰み乍去其方如何致して、此祝言に邪魔を入れうと致すな。

ボラ 御前、それには少々曲がった手段を用ひます。乍去其曲り目が見えぬやう巧みに表面を蔽ひます。

ジヨ 手短かに語って聞かせい。

ボラ それは御前、此私がヘロー姫の侍女、マーガレットと深い仲でゐるところを、丁度一年程前に、御耳に入れた事がりましたな。

ジヨ いかにも覚えて居る。

ボラ されば夜中何時何時でも彼のマーガレットを、ヘロー姫の寢室の窓から首を出すやうにと私が頼めば、其通りになります。

ジヨ してそれが何うして、此縁組に故障を附ける毒になるのぢや。

ボラ 其毒の調査は、御前の御手次第でまいります。先づ御兄君公爵の許へ御出なされて、此様に仰せられい、公爵には、彼の評判者のクラウヂヲ殿を――序ながら、此君の御身の上は、精々御賞揚なされませい――ヘロー姫如き汚れ果てた淫婦に御娶せなさるとは、こりやいたう御名譽を御毀けなさると申すものぢやと、口を極めて仰せられい。

ジヨ して證據はと問はれたなら何と致す。

ボラ さて其儀でまいります。公爵を騙らかし、クラウヂヲ殿を怒らせ、ヘロー姫を一生廢物にし、レオナト殿を殺す程の證據がまいります。何とこれより上の御望はまいりますまいが。

ジヨ 彼等に一泡吹かせう爲めには、何事でも否とは申さぬ身共、其證據を教へる。

ボラ 然らば好き機を見て、ペドロ様とクラオチヲ伯を密と御呼出し
なされ、彼のヘロー姫には此某といふ情人がある、と仰せられい。さて
此縁談の仲人役たる公爵の面目を思ひ、又此似非處女の食はせ物を
推付けられうずる、伯爵の名聞を思ふ心の切なる様を御粧ひなされ、
此様な一大事を發見出したも、畢竟此心故と仰せられい。乍去彼奴等
とても、證據を見ては、中々眞實とは受けまますまい。處て私が祝言の前
夜と申すに、ヘロー殿の寢室の窓下に隠れ、マーガレットをヘローと呼
び懸け、又マーガレットには、私をボラチヲと呼び懸けさせませう程に、
御前には公爵伯爵の兩人を密かに連れ出し、此生きた膺證據を、御眼
に懸けられませい。——其夜は素より某がよしなに計らひ、眞のヘロ
ー殿は、何處ぞへ外させて置きます。さすれば一見致した所では、ヘ

ロー殿の不義に疑なく、嫉妬の目には、推了が即座の實事となり、祝言
の仕度萬端は、見事水の泡となるてムりませう。

ジョ 出来た、それ故には如何なる破目に陥らうとも、その計略は致
して見やう、まんまと爲了せたなら、褒美には汝に千兩遣す。

ボラ 御前に於かせられても、公爵への讒訴をぬからぬ様になされませ。
私に於ては仕損ずる事ではムりませぬ。

ジョ 然らば身共はこれから參つて、祝言の日取を尋ねて參る。

と一同退場

第三場——レオナト家館の庭先 晩景

ベチヤック登場、一人の使童後より従ひ來る

ベ子 コレ使童殿。

使童 何御用でムります。

ベ子 外でもない、身共が室の窓の上に、書物が置いてある、あれを此處へ持って来て呉れい。

使 折角此處迄参りましたものを。

ベ子 それは身共も承知の上ぢやが、最一度往って又来て呉れい。(退場 使童)
—さて—戀に浮身を筈す、俗物共の恐かさを見て、淺はかな心ゆきと嘲み笑つた當人が、何時しか自分で戀をして、己が嘲弄の的となるとは呆れたもの。クラウデヲが今日此頃は正しくそれ、陣鐘陣太鼓の外には、音樂などに氣も留めなんだ事もあつたに、今は絲竹の音をゆかしかる、善い甲冑があると聞けば、十里の道を遠しとせず、に驅け付けた

男が、新調の下着の色摸様に、十夜も寝ずに苦勞する、朴訥な武將らしう、はきく〜と無遠慮に口をさいたも、遂昨日、今日はぬらりくらりと言葉の文を飾り立つる。イヤ彼が言葉は大牢の馳走と申すもので、様々の珍珠に充ちて居る。かく申す身共なども、此眼の黒い中に彼の様に變れば變れるものであらうか。それは何共申されぬが、追がに其様な事はあるまい。尤も彼の戀奴が身共を捕へて、魚にしたり牡蠣にしたり致すやも知れぬ。乍去間違つても戀奴が身共を魚なり牡蠣なりに化せしめぬ中は、身共に左様な恐かしい舉動はさせられまい。茲に一人の婦人がある、殊の外美しい。—乍去、身共は氣にも留めぬ、茲に又一人は至って賢婦ぢや—なれども身共は氣にも留めぬ、又茲に一人は至極の貞女ぢや—同じく身共は氣にも留めぬ、大勞の婦人の善

い所を、一人の女で兼ねれば知らず、さもなくば一人の女故に、身共は心を動かさぬ。先づ身共が心を動かす様な婦人といへば、金持でなくてはならぬ。又賢婦でなうてはならぬ、さらずば言葉も交すまい。又貞女でなうてはならぬ、さらずば相談にもならぬ事ぢや、又美しうなうては、顔を見るも厭であらう。又優雅でなうては、側へ寄するも厭ぢや、又鷹揚にないならば、何のやうな女でも相手にならぬ。又總じて辯舌爽かに、糸竹の道にもたけ、髪の色——イヤこれは造物主の御心任せ——ヤア、彼處へ公爵と戀殿がわせられた。拙者は暫し四阿の中へ隠れると致さう。

と四阿の中へ退く

ドン・ペドロ、クラウツァナ及びレオナト登場、後よりバルセイ

サー琴を携へ出来る

ペド 時に最一度琴を聞かうてはムらぬか。

クラ 如何にも聞きませう。——何と静かな夕暮ではムりませぬか、音楽に合せる爲め、わざと鎮めた様でムります。

ペド さて貴殿は、ベチチック殿の隠れたを御存じか。

クラ よう存じて居ります。——何れ音楽が濟んだ後で、隠れた鬼に一杯食はせて遣しませう。

ペド サア、バルセイサー先刻の唄を又聞かせて呉りやれ。

バル 此様な悪い聲で、度々唄ふは樂器の汚れてムります。御免を蒙りませう。

ペド 己が技倆を素知らぬ顔誇らうとも致さぬとは、けに名人の證據、何

卒早う唄うて聞かせい、此上口説立は致し度うない。

口説立と仰有るならば、如何にも唄ひませう。えて戀を致す者は、これならばと思ふ程の女でなくとも、先づ口説いて見るものでムリます。そして云ふことを聞かぬ中は、何時迄も口説立て、戀しいとしいと誓詞立を致しまする。

先づく早う唄うて呉りやれ、もっと文句が云ひたくば、楽器に乗せて申せ。

とバル音楽を奏する

（白）さてく入神の曲ではある、彼の精神が今しも弦の音に通ふと見えた。——思へば不思議、羊の膺から取った弦が、聴衆の精神を奪ふとは、——とは申せ此身共には、矢張り獵笛の方が結構だ。

とバル次の歌を吹ふ

泣くな嘆くな早乙女子、男心は仇浪の寄する水際の陸と海、腫定めぬ習ひとぞ、

泣くな泣きやるな任せよ風に

恨み嘆ちをさらりとやめて

浮世を唄て軽うやれ。

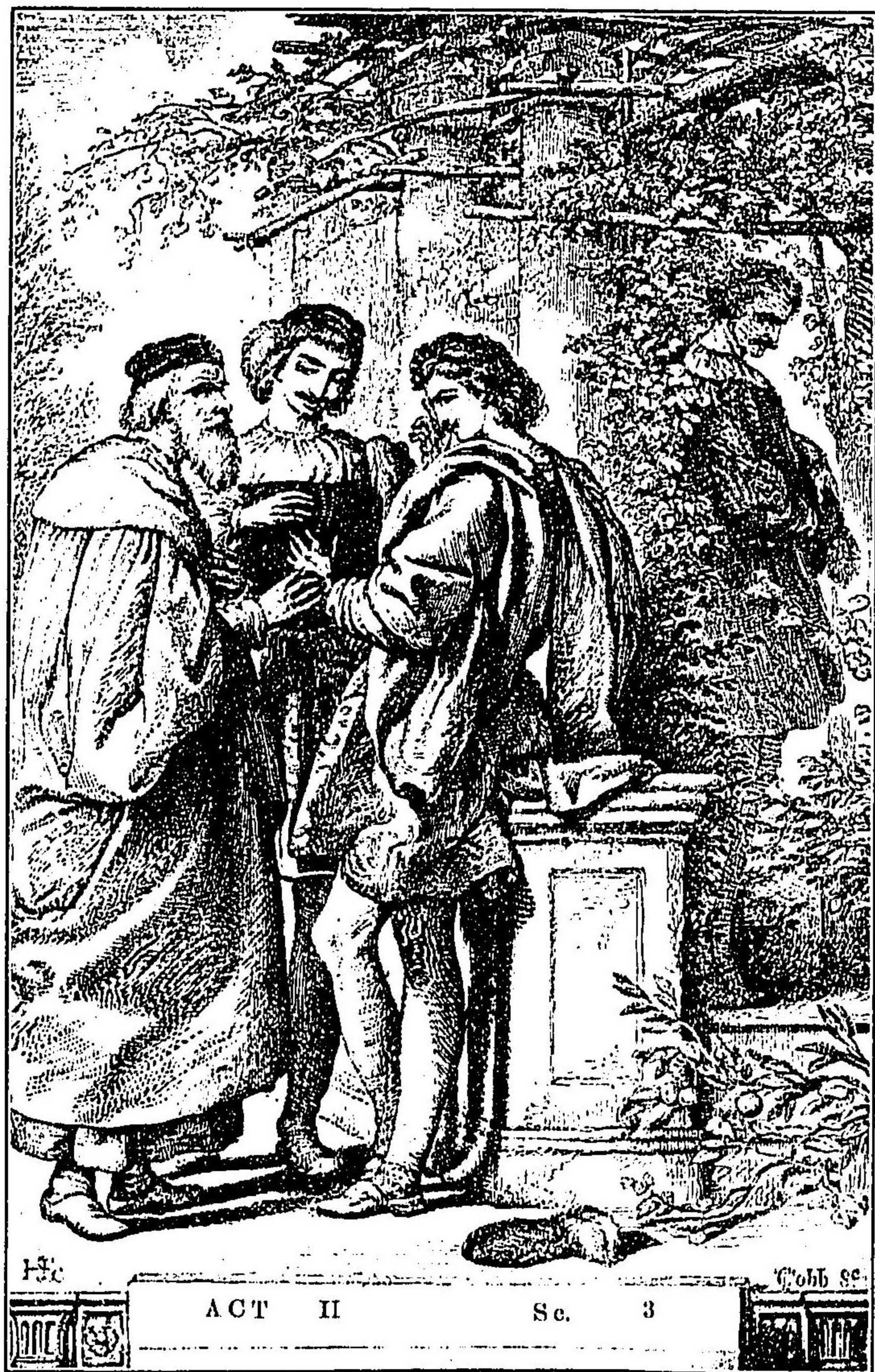
唄も哀れのしみく、と身に泌む聲はうやつらや

神代このかた頼まれぬ、男心をさて何とせむ

泣くな泣きやるな任せよ風に

恨みつらみをさらりとやめて

浮世を唄て軽うやれ。



ラッ 左様々其見當ては鳥しな遠間でつらとてつら居すま

ヘド いやこれは善い歌ぢや。
 マル 歌は善いが唄い方は拙つたならムりまする
 ヘド さうでない、其方の唄ひ方も好かつたぞ
 マチ (旁)アムけしからぬ、犬共が此様な聲を出したなら、早速人に殺され
 う。其犬の遠吠同様凶事の兆しるしでもありさうな彼奴の聲、夜鳥の聲は疾
 病の前兆ぢやと申すげな、それでも其方がまだ優やさぢや。
 ヘド さて聞いて呉りやれ、バルセイサア、何ぞおもしろい曲を一つ詠うたへ
 て置くが、明晩へロー嬢の御室ごむろの窓下で、聞かしては呉りやるまいか。
 (夜間戸外の娯樂なりと知るべし)
 マル 心得ました、精一杯善いものを致しまする。
 ヘド 何卒其様致して呉りやれ、(とバル及退場)——時にレオナト殿、今日承

た事は、ありや一帯何ういふ次第でムる、姪御のピートリス殿が、ベチ
チック殿に戀焦がれてムるとは誠でムるか。

クラ 左様く——其見當で間違なし、鳥はぢとして栖まって居ます(此は白
レドへの注意なり、意味は其合話をそのまゝに云々)——某も彼の婦人が荷
にも男を戀慕はうとは思ひませなんだ。

レオ 某とても御同様殊に人目には、如何にも忌嫌ふやうに見せ懸ける、
彼のベチチック殿を左様に戀慕ふとは、重ねくの不思議でムります。
ベチ (白旁)こりや不思議、如何なる風の吹廻しぢや。

レオ されば如何なる次第か存じませぬが、餘程思ひ詰めました様子で
ムります。——凡慮には逆も思ひ測られませぬ。

パド 左様な振を致すのではムらぬか。

クラ げに其様な事もムリませう。

レオ 何が、振ではムリですかい。戀する振が彼の様に、眞實の戀らしう見せられるものではムリませぬ。

ヘド ハテ何のやうな素振を見せられますか。

クラ (自) 旁) よう釣に餌を御差しなされい、此魚は釣れますぞへ。

レオ 何のやうな素振と申して、御覽あれば判りますか。—— (クラに) 貴殿は恐女より篤と様子を聞かれましたらうな。

ヘド して其様子と申すは何とてムる、某は何うも不思議でなりませぬ。

彼の婦人の胸ばかりは、戀の矢玉でも、やはか攻落しは致されまいと存じましたに。

レオ 某とても其通りと、思ひ極めて置きました、わざわざベネチック殿に對

しては、

ベネ (自) 旁) 何謬言と云ひけなす所なれど、彼の白髮老父が申すことなれば、大方眞實であらう。悪意あつての空言なりや、彼の様に眞顔で申されるものではない。

クラ (自) 旁) まんまと毒に當てられた様子、サア、後を續けた。

ヘド して其戀の思は、ベネチック殿へ申送つた様子でムるか。

レオ 否、決して此戀は知らさぬと、誓迄立てたげにムります、其處が乃ち彼女の苦患でムります。

クラ 眞實其通りでムります。ヘロー殿より承りましたが、ビートリース殿の云はるゝには、かくも屢ば嘲弄なしたる此妾、今更戀しい、いとしいとの附文がなるものかと、申さるゝげにムります。

レオ いかにも附文を書き始める度毎に、其通りに申します。イヤ一晚の
中には、凡そ二十度も起出して、下着のまゝ机に座り、一通の文を書上
げます。——これは皆娘より承りましたので。

クラ 其一通の文と仰せられたに依って、ヘロー殿から承ったおもしろいし、
やれを思出しました。

レオ お、彼女が文を書上げて、一通り読み返し居りました時、ふと見れ
ば、ベチデックとビートルリスが、一枚の紙(原文紙をシートといふ然るに意味す、故に此
いやいあり)の上に、一緒に居たと申すことではムらぬか。

クラ いかにもそれでムります。

レオ さて書上げた其文を寸断寸断に引裂き、宛名の主に笑はれると知
りながら、此様な文を書くとはと、我と我身を罵りつゝ、自分の心で推

積つても知れたこと、若し彼君から此様な文を附けられたなら、よしや
妾が内心彼君を戀ふとても、妾は屹度笑はずには居られまい。

クラ それからどっかりと膝をつき、泣いて咽んで、胸を叩き髪を撈り、祈った
り咀ふたり——「おしいとしのベチデック殿——あゝ堪へ難や——」な
どと申されるげにムります。

レオ げに其通りく、娘が左様に申します、物狂ほしい其有様萬一の事
でもありはせぬかと、娘は氣遣はしうてならぬと申し居りました。こ
れは眞實の事でムります。

ヘド ウーム、こりやビートルリス殿が、自分で云ふは否ぢやとならば、何
うぞして我々より、ベチデック殿に知らせて置くが宜うムらう。

クラ そは又何の爲にてムる、かくと聞いたならベチデック殿には、尙ほく

弄り物にして、酷い目を見せらるゝばかりでムらう。

ヘド 左様な事を致したなら、察そベテデック殿を殺して了うが、世の中の爲めてムる、殊に彼婦人は、誠に善い婦人て、淑徳堅固は申すまでもな

クラ として一方ならず知慮に富ませられる。

ヘド たゞベテデック殿を慕ふばかりが、千慮の一失でムらう。

レオ おゝ御前彼の繊細な身体の中で、知と戀が戦ひ合つては、勝利は戀の物と大抵見當は付きます。某は彼女の叔父でもあり、後見人でもムります故、一層残念でなりませぬ。

ヘド それ程慕はるゝなら、寧ろ此某を慕うて下さればよいに、某ならば、何もかも棄てゝ置いて、先づ彼君を妻に持ちます。いや何卒これは、

兎も角もベテデック殿に御告げ下され、そしてベテ殿が、何と申すやら御聞き下され。

レオ 左様に致しても差支はムりますまいか。

クラ ヘロー殿の推量では、何の道ビートルリス殿は、死ぬるであらうとの事でムります。と申す理由は、彼君が口づから、ベテデック殿に思はれずば、寧ろ死ぬると申すげにムります。然るに彼君の氣性と致して、己が戀を打明ける程なら、先づ死ぬるでムりませう。若し又ベテデック殿が、假に彼君を慕うて、云寄ると致すとも、彼君が例の片意地を止めて、二返事で靡く程なら、是亦寧ろ死ぬるでムりませう。

ヘド 乍去ビートルリス殿の仕打も、思へば尤でムる。其戀を打明けたなら、ベテデック殿が弄ぶるとは、いかにもありさうな事ぢや、方々も御承

知の通り、ちと悪口は巧者なベチデック殿の事てムる。

クラ ベチデック殿も、至って好男子てムります。

ヘド 實に愛嬌者てムるが。

クラ そして某の存ずる所では、至って知慮にもたけて居られる。

ヘト 實に智者とも申すべき、鋒鏘を折々現はされます。

レオ 且つ又天晴の勇者と、某は見て取りました。

ヘド 勇氣は如何にもヘクトル(トロイ)の勇士にも劣りませぬ。乍去争闘と申す折には、之に處するの道誠に賢なる哉と申すべきでムります。即ち大事を取って、可成避けるやうに致すか、若くは神意を恐れ憚り、怖々之に當るか、二つの中何れかを取ります。

レオ 神を敬ふの心深ければ、勢ひ争闘は避けずばなりません。若し萬

止むを得ず、いざ争闘と申す時は、自然神に對する畏敬の念故、自づと四肢もわななくは、こりや尤の事てムる。

ヘド ベチデック殿は、即ち其通りてムる。彼の誰憚らぬ戲言笑語を聞くときは、其様にも思はれませぬが、至って敬神の念は深うムる。イヤそれは兎も角、姪御前には何とも御氣の毒ぢや、寧ろ吾等からベチデック殿に彼君が懸想の一條を話しては如何てムらう。

クラ イヤ決して御話しなされますな、懸がてピートリース殿が思ひ還して、此戀の自滅致すを御待ちなされ。

レオ 思ひも寄らぬ事てムります。此戀よりも彼女の胸が、先づ焦がれて自滅致しませう。

ヘド ハテ然らば此儀に就ては、御息女より更に承る事と致し、先づそれ

までは此儘に致して置きませう。某はベチデック殿をいとしう思ふ者
でムるが、何卒自ら省みて、彼の様な淑女に慕はるゝとは、何ぼう冥加
に餘れるといふことを悟らせたらう。

レオ 然らば御前、かう御出なされませ、最早晝餐も調ひましてムります。

クラ (自旁) これでいかなベチデック殿も、心を動かさなんたら、身共が推量も、
これから一切頼みにならぬ。

ペド (自旁) 此上はビートトリスも、同じ網に懸けねばならぬ。但しそれはヘ
ロー嬢と、侍女達に任する手筈。二人が二人、互に向ふから慕はれると
實もない事を信付け込むやうに、首尾克く参たら善い慰み。見て遣りた
いは其場の様子、但しそれは兩人ながら、口には一切出さぬ。默劇の幕
であらう。先づ差當り此晝餐には、ビートトリスに、ベチデックを迎へさ

せう。

とドン・メドロ、クラウツアチ、レオナト退場

ベチデック四阿の中より出て来る

ベチ 彼の様に、眞面目腐って話し合ふたは、こりや一時の座興ではあるま
い。ヘロー殿から、皆んな聞いたと申し居た、そして何れも彼女を哀れ
がる様子、又話の模様では、中々深う思詰めた様子。何ぢや身共を慕ふ、
ハテ然らば此等からも報いずばなるまい。方々が身共の事を、様々に
申されたが、身共は先方から戀文を附けられたなら、定めて傲慢な摺
挨を致すであらうと申し居た。又ビートトリス殿とても、戀らしい様子
を身共に見せる程なら、寧ろ死ぬるであらうなど申し居た——イヤ身
共は從來妻帯致さうなど、思ふた事はない——さればとて、身共が

傲慢と見られてもならぬ——想へば他人の評言を聞いて、あゝそれと我が身の舉動を、直す事の成る者は仕合者ぢや、何ぢや彼の婦人は美しい婦人ぢやと申すか——いかにも其通り、身共も保證申す、そして淑徳堅固ぢや——それとても左様でないとは申されぬ、そして知慮にも富み、たゞ身共を思ひ込んだが千慮の一失ぢや——げに身共を思ひ込めばとて、それ故彼人の知慮が増さうとも思はれぬ、さればとて、それが愚痴の骨頂とも思はれぬ、其故は、身共とてもさう聞いては、人情彼人を戀慕ふ様にならずには居られぬ、永らく無妻を我説に致した此身共、今更縁談を致すと聞いたなら、定めて身共を嘲り笑ひ、陳い洒落などで冷かし懸ける者もあらう、乍去嗜好と申すは折々變るものぢや、若い時の好物が、老いての後の嫌厭物となるは間々ある事、洒

落や笑談其外紙型の彈丸同然な當てこすりなどを申されたとて、苟にも男たる者が、一旦思ひ込んだ事を、其儘せずに差置かうか否々、世界に人種を絶やしてはならぬ、身共が一生獨身で終らうと申したも、畢竟身共が妻帯致す迄、よもや生存へうとは思はなんだばかり。——ヤ、ピートルリス殿が参つた、八幡美しい婦人ぢや、げに何うやら戀らしい様子を見せて居らるゝ。

ピートルリス登場

ピ— サア——晝餐の席へ入らせられませう。主命否み難く、御迎へに参りました。

ベチ— これは、ピートルリス殿には御太儀千萬忝らう。

ピ— 其様な御禮を受くる程、太儀な思ひは致しませぬ、貴郎の其御禮こ

そ却つて御太儀千萬に存じます。ハテこれが太儀の役目なら、妾はかう参りは致しませぬ。

ベ子 然らば此役目を嬉しいと思召すか。

ビ子 いかにも嬉しう存じます。丁度針の席（しき）に坐つた程の嬉しさを、雀の涙程覚えませぬ——まだ御飢（い）じうはムりませぬか、左様ならば御先へ。

とビ子退場

ベ子 ハ、ア、イヤ、イヤながら主命否み難く、御迎へに参りました——これには裏の意味があらう。其様な御禮を受ける程、太儀な思ひは致しませぬ。貴郎の其御禮こそ却つて御太儀に存じます——思へばこれは、貴郎故なら、何の様な役目でも、太儀とは思ひませぬ。これが太儀なら、一言禮を述ぶるのも太儀であらうと申すこと——ハテ彼君の心を

察せずば、身共は野人彼君を愛せずば、身共は猶太人ぢや——何はしかれ此上は、早速彼君の肖像（ぶざう）を求めて参らう。

と退場

第三幕

第一場——レオナト家の庭園

ヘロ、マーガレット、ウルスラ登場

ヘロ コレ、マーガレット、其方は一走り、御座敷へ住つて来て給もれ、ビートリス殿には、公爵やクラウヂヲ様と、彼處に御會話をなされてぢや程に、そつと御側へ寄つて耳打ちをして、此妾とウルスラとて、只今御庭を歩ひながら貴嬢の御噂で持切りぢやと御告げ申しや。そして其方も漏

聞を致したと申して、貴嬢にも早う御出の上、彼の四阿の中へ潜んで、御立聞を遊ばせと申して來や。幸ひ彼の四阿は忍冬が生茂って、日の光りをさへ中へは入れぬ。思へば其忍冬も、元は日の光で茂ったもの——君恩の厚い宰相が、舊を忘れて、遂には君を蔑に致すといふやうなものであらうかいな——すりや屹度、ビートルリス殿には、會話を聞かうと、其四阿へ忍んで來られうぞい。其方の役目は、只だそれだけ、まんと首尾よう致してたもれさ。早う往って來やれ。

マ 心得ました、早速此方へ御出なされるやう、此私が御引請申しました。

とマーガレット退場

ヘロ そんならウルスラ、ビートルリス殿が、御出なされたなら、コレ此徑

を行きつ戻りつ、ベネチック様の御噂ばかりを申すのぢやぞや。妾が彼君の御名を口にしたら、其方は遠慮會釋もなう、口を酸くして褒めちぎりや。妾は又彼君が、ビートルリス殿故に、戀病に罹らせられたと云うて聞かさう。耳から這入って、胸に傷を付けうといふ、戀神の機關矢は、此様な仕組ぢやわいな、それ始めたく。

とビートルリス後方に現はれ出づる

ヘロ (白) 笑止や、ビートルリス殿が、此會話の聞きたさに、鶴の様に地を這つて、彼處へ忍び來られた様子。

ウル (白) 釣魚をして面白いは、黄金色の尾鰭で、銀色の流を切つて來る、魚の姿が見え透いて、それと見る間に、欺騙の餌に、飛びつく時ぢやと申します。ビートルリス様も何うやら、丁度其様にして、釣れさうでムリ

ます。それ其忍冬の葉蔭へ、今御潜みななされました、ハテ私の白はぬかる事ではムりませぬぞい。

へロ (旁) そんなら此甘い誘惑の餌が、首尾克く彼君の耳に入るやうに、もつと近くへ押懸けやう——

と兩人四阿の方へ寄る

へロ (一段聲を高) いや喃ウルスラ、ほんに彼君は、餘り偏屈が過ぎるやうぢや、山から捕ったばかりの鷹のやうに、いら／＼とした御氣風ぢやな。
ウツ 乍去ベテデック様が、其様に心から底から、ビートルリス様を御慕ひ遊ばすとは、そりや眞實の事でムりますか。

へロ 公爵様やら、クラデヲ様やらの御話ぢやわいな。

ウツ そして貴嬢から、それをビートルリス様の、御耳に入れるやうとの

事でムりましたか。

へロ 其様に仰せられて、あつたけれど、妾は却つてベテデック様おいとしいと思召さば、ベテデック様へ皆様より、叶はぬ戀と御諦めあるやう御勧めなされ、努ビートルリス殿の御耳に、其由御聞かせあるなと申上げておいたわいな。

ウツ そりや又何故でムります、彼の様な善い殿御が、ビートルリス様の御婿君に、何御不足でムりますぞへ。

へロ おゝ戀の神も聞こし召せ、妾とてもベテデック殿を、何一男の果報に、外れた御方とは思はねど、ビートルリス殿の彼の御氣性、あんな女子は外處にはあるまい、御眼の中には、何時も輕蔑と嘲笑が光つて居て、見る物事は何でもくさし、世の中に貴い物は、御自分の智慧ばかり、其外

の物事は、悉皆阿呆らしう見ゆるげな。彼の君に戀などは思ひも寄らず、其様な事を考へる事さへありはすまい。御自分といふものが、兎角何よりも頼もしう、戀しいと見えるわいな。

ウ　ほんに左様でムリませう。成る程ベテダック様の御戀慕を、御耳に入れるは宜しうムリませまい。屹度散々にお弄り遊ばすでムリませう。
ヘ　ハテ其方の云やる通りぢや、何の様に發明な、何の様に高尚い、何の様に若い美しい殿御でも、ピートリス殿が散々に、云消さぬ御方は一人もない。顔が美ければ、間違つて男に生れた女ぢやと云ひ、色が黒ければ、道化の假面の出来損ひぢや、身長が高ければ、志ほ首を附け損なつた槍の化物、低ければ、指環の瑪瑙に刻み込んだ肖像同然、口数が多ければ、何んな風にも靡く風信のやう、無口の方なりや、感じのない木石

同然など、此様な事ばかり、何のやうな殿御でも、缺點だけを暴露出し、正直や質朴など、いふやうな美點は云ひもせず、褒めもせず、知らぬ顔。

ウ　ほんに、其様な缺點探は、褒めた事ではムリませぬ。

ヘ　ほんに、彼のピートリス殿のやうに、一風變つた舉動をして、爲まじきことを爲るといふは、餘り褒めた事ではない、とはいふもの、此事を而と向つて彼君に云はう人がない。若し此妾などが云はうなら、それこそ弄り退け笑ひ退け、洒落の縮木で括殺されう。夫故お氣の毒でもベテダック様には、埋火のふすくと表へ出ず、獨りくよ／＼胸の中で、焦がれて消えさせ申すがよい。笑はれ弄られて死ぬるのは、擦ぐられ死に死ぬるも同然、寧ろ黙つて死ぬるが優

ウル てもムりませうが、矢張り御話しなされませ、そして何と仰せらるゝか、兎も角も御聞きなされませ。

ヘロ イヤ妾は寧ろベテデック様に御逢ひ申し、其御戀慕を御忍びあるやう御話申したい。そして何ぞビートリース殿の悪口を、存の儘に云觸したい。善からぬ告口と申すものは、何れ程人の戀を冷すものか、知りたいものぢや。

ウル おゝ其様な御告口などは遊ばしますな、ビートリース様ぢやとて、眼から鼻へ抜けるやうな、知恵分別で評判の高い姫君、ベテデック様のやうな、願うてもない御君を、よもや否とは仰せられますまい。

ヘロ クラウヂア様は別として、ほんに伊太利切つての一男。
ウル 御氣に觸つたなら御免なされませ、腹藏なく申しますれば、御標致とい

へ御容姿と云へ、御辯舌と云へ、又は御氣前といへ、伊太利中で一番評判の高い御方は、ベテデック様でムりませう。

ヘロ ほんに偉い御高名の御方ぢやな。

ウル それと申すも、畢竟は御人物が御宜しい故實のない名ではムりませぬ——して貴嬢様には、何日御祝言をなされます。

ヘロ ハテ、何日でもない、明日ぢやわいな。コレ此方へ來やれ、裝束を見せうわいな、そして明日は何れが宜からう、其方が見立てを聞きたいものぢや。

ウル (白) まんまと納振に懸けました、鳥は屹度此方のものでムりませうぞ。

ヘロ (白) 其様に首尾よう參るなら、戀といふも機會一つで成るものかい

な。矢て射て落す戀神もあれば、係蹄かひで捕る戀神もあると見える。

とヘロー、ウルスラ退場

ピートリース進み出づる

ピ― え、此耳も燃ゆるやうな、こりや眞實ほんじつとも思はれぬ。さて、妾は其様に、高慢と侮蔑あはれで、人にも厭あはかれ居る事か。そんなら今より、侮蔑は取つて棄て、高慢と名に立てる、娘の意氣地も早や棄てよ。此様なものを、柀はせに何名譽いせ——ベチデック様、貴君あなたは飽くまで其御心中を御立て下され、其御返報には、妾の頑かたくなな此胸を、貴郎の優しい其御手に合せませう。其方あなたより御慕ひ下さらば、此方よりも御慕ひ申し、縁ゆかりの糸をたぐり合ひて、二人一緒に陸まじく、たのしく此世を送りませう。人々の批評ひやうには、立派なく、殿御あまとや、人言ひとことはとにかく、妾は自分で確しかと其様に思ふ

て居りますぞや。

と退場

第二場——レオナト家の一室

ドン・ペドロ、クラウゲナ、レオナト及びベチデック登場

ペド 貴殿が御祝言の相濟む迄は、某も滞在致す、さてそれさへ濟めば、アラゴンへ参るてムらう。

クラ 御許しさへあらば、某も御同道致したうムります。

ペド イヤそれでは却て、折角新婚の御たのしみを妨ぐるものでムる。小供に新調の衣服を見せて置いて、着てはならぬと申す様なものでムる、只だベチデック殿に限つては、御立寄を願ひたい。頭かしらの先から足の蹠あしま

で洒落で固め、其上最早一度ならず二度ならず、狙ひ定めた戀神の弓弦を断ち切つて、追がの戀神に斷念を付けさせた變り者、ベチヂク殿の御心臓は、釣鐘を懸けたやうで、鏃如きは、手もなく彈ね返すと見えました。して又御舌は即ち其搥木——心臓に懸いた事は、早速舌で喋つて了らう。

ベチ いや方々、某も最早從來通りの某ではムリませぬ。

レオ 某も左様に存じます。何とやら少々御元氣が足りない様に存じます。

クラ 若しや戀病にても罹られたのでは。

ベド イヤ飛んだ事を申さるゝ。ベチヂク殿の体内には、戀などに感ずるやうな、律義な血は一滴もムるまい。少々元氣が御不足とあらば、それ

は定めて懐中でも、お淋しくなられたのでムらう。

ベチ ナニ少々齒痛が致します。

ベド 然らば抜いてお仕舞なされ。

ベチ 寧ろ此齒を殺して仕舞いたらム。

クラ 先づ殺しておいて、後で抜くが刑法の作法でムる(沙龍時代には罪人の骸より更に臟腑を引抜くの變習ありたりとぞ)

ベド 何と齒痛故の其御不元氣でムったか。

レオ 齒痛と申せば高が口中に潜む邪氣、さらば虫一匹の故でムりませう(齒齧は虫齒根に入りて之を食ふと信ぜられたるは我國に異ならず)

ベチ いかにも、他人の難儀は誰もよう堪へられるものでム。

クラ 何のかのと仰せらるれど、某は矢張り戀病と御見届け申した。若し

これが、さる婦人への戀でなかつたなら、戀人のすなる常例の習風も、餘り當にはなりませぬ。ベテデック殿には、此頃毎朝、よう朝子の掃除をせられるが、これは何かの兆てはムらぬか。

ベド 又は理髮店などに入込む處を、誰ぞ見届けた者でもムったか。

クラ それはムりませぬが、理髮店の職人を呼び迎へられたは、隠れもない事。そして今迄生茂った頬鬚、鬚鬚は、剃り取られて、鞠の心となりました。

レオ げに、鬚鬚を御剃りなされた爲め、一層若くなられました。

ベト それどころではムりませぬ、麝香を摩りつけて居られる様子、げにこれでは誰にも嗅ぎ分けられませう。

クラ これ即ちベテデック殿には、戀をして居られると申す事でムらう。

ベド 第一に心を留むべきは、彼の物思ひ顔でムる。

クラ して又顔を研が、れるなど申す事は、從來なかつたベテデック殿。

ベド 又は紅粉を用ふる事なども、イヤこの儀に就ては、彼此との噂がムる。

クラ 其上彼の御得意の洒落冗談が、物思ひに閉ぢられて、手も足も出ぬ始末。

ベド げに何ぞ心に懸かる大事があると見える、是は戀でムらう、戀と致さう。

クラ 其上某は、ベテデック殿を慕ふ婦人を、承知致して居ります。

ベド それは一、承りたい。大方ベテデック殿を、よう御存じない婦人と見え

クラ イヤ至つてよう御存じて、御口の悪い迄、ちやんと御存じの婦人でム
りますが、何でもかでも君故ならば、死んでもと申さるゝげにムリま
す。

ハド フム死ぬなら葬つて進ぜう——ナニサ、ベテデック殿の懐の中へ成佛
致させうと申す事で。

ベテ 色々と御心配下さるが、それが齒痛の呪法にもなりませぬ——時
にレオナト殿、一寸別室へ御同道を願ひたい、偶人の坊共に聞かせた
うない御話を、少々貴殿の御耳に入れたらムります。

とベテデック及びレオナト退場

ハド さてこそビートリースの件に就き、心中を打明けらうとの心ぢやな。
クラ その通りく、今頃はヘロー、マーガレットの兩人も、ビートリース殿

へ、例の秘術を盡したてムりませう。されば此後は、熊のやうに喧嘩好
の彼の二人も、出會頭に噛み合ふことはムりませぬ。

ドン・ジョン登場

ジョ 申し兄者人、

ヘド ヤア、弟。

ジョ 御都合が宜しくば、一言申上たい事がムります。

ヘド それは内密でか、

ジョ 成るべくは其様に、尤もクラウデヲ殿は、御一座なされても差支は
ムりませぬ話と申すも、即ちクラウデヲ殿に關はることでムります
れば。

ヘド してそれは何事ぢや。

ジロ (向ひに) 貴殿には、明日祝言と承りましたが。

ヘド 御身も承知の通りぢや。

ジヨ イヤ某は判然承知致しませぬ、されば某の承知致す事柄と申すも、クラウヂヲ殿に於ては、早や御承知でムりませう。

クワ 何ぞ故障がムらば、何卒御用捨なく御漏し下され。

ウロ 是迄某は、兎角貴殿の御爲めにならぬ者のやうに、思召されたてもムらうが、今後を御覽下され。先づ差當り只今御漏し申す事柄を、よう御考へなされて、某の人物を御判じ下されい。さて愚兄には、貴殿といから御入懇にて、親愛の極みに、貴殿が明日の御祝言に就きても、かにかくと肝を煎りしとの事でムれど。——想へば過てる肝煎、過てる周旋まわらわでムる。

ヘド ハテ何事ぢやな。

ジロ 某の御話し申上げたいと申すは、先づ何事も手短かに申上げますれば、彼婦人は淫婦でムる——ナニサ是迄も永らく浮名を流したとの事でムります。

クラ それは誰でムる、へローでムるか。

ジロ 如何にも左様、レオナトが娘のへロー、貴殿のへロー、イヤサ誰彼と定めぬ主ぬしのへローでムる。

クラ そのへローが淫婦ぢや。

ジロ イヤ淫婦と申しただけでは、彼婦人が腐った性根を、十分に示す事はなりませぬ。淫婦よりも、一段上手うまの名を附けて遣りたい、貴殿何ぞ好い名を御心付きなされたなら、早速其名を御遣しあれ。コレ、御驚

さなされな證據を御覽に入れう。即ち今夜某と共に御出あれ。彼婦人が寢室の窓より、忍ぶ男のあるを御目に懸けう。時も時祝言の前夜で、ムる。さて其上にて、貴殿尚ほ彼婦人を御いとしく思召さば、明日御祝言をなされませ。乍去、先づこゝは御心を御改めなされた方が、御名譽の爲めでムりませう。

ウ 其様な事がムらうか。

ヘド 某にはどうも眞實とは思はれぬ。

ジロ 御自分の御目で御覽なされた上、それでも虚言と思召さば、知らぬ振を遊ばすも御隨意。兎も角も某に従て御出あらば、立派な證據を御目に懸けう。さて其上にて、何かと御見聞爲されたなら何うなりとも遊ばしませう。

クラ 今夜果して、明日の祝言を、破談に致すべき程の理由を、目撃致したなら、某は祝言の席上、満座の中にて、へローを辱かして遣します。某とても貴殿に代つて、口説落せし廉がムれば、共々辱しめて遣しませう。

ジロ 某は御兩所に、現場の證據を御見せ申す迄は、先づへロー殿を、此上とやかうは申しますまい。先づ、今夜深更の頃迄、御辛抱なせられ、せ、そして何が出るか御待ちなされ、

ヘド あゝこれは、ひよんな事になつたものぢやな。

クラ あゝ好事魔多しとはこれでムらう。

ジロ あゝよくぞ禍を未前に防ぎました——イヤ正躰を御覽なされたなら、屹度かう仰せられませう。

と一同退場

第三場 街上

ドックンベリー(目付) ヴァーアース(全) シーコール(夜番) オートケーク(上同)
及び夜番人大勢登場

ドック ヤイ、夜番の者共は何れも確實な者であらうな。

ヴァ 確實な者でムリます。ハテ不確實な事を致さうなら、忽ち神罰に當りませう。

ドック 荷にも公爵殿下の(此公爵は此國の領主を意味) 番人に撰ばれながら、左様な事を致さうなら、大抵な神罰は、まだ難有いと思ふがよい。

ヴァ 先づはドックベリー殿、此者共に御用の程を仰せ付けられませう。

ドック して先づこなたは番頭には誰が宜からうと思召す。

ヴァ されば、ヒューオートケークかデョージシーコール、此兩人の中でムリませう、兩人ながら読み書きを致します。

ドック 罷り出し、シーコール、云ひ聞かす事がある。抑も其許が名譽は神の賜、夫れ容顏の美しきは運星の廻り加減なり、然れども讀書の業に至るては、是れ造化自然の致す所(ドックは無學の身ながら、狼りに六つかしりなり)

シー イヤ讀書の業は――

ドック ウム讀書の業は、其方の得意ナ、かう申す所存であらう。さて其方の容顏は、ハテこれは神明の賜と難有く御禮を申上げ、決して自慢致すてないぞ、また其方が讀書の業は、左様な藝道に入用のない時の嗜み

に致せ。さて今夜は此大勢の中で、其方が一番小賢しく、番頭に倏り役とあるに依つて、提燈持(即ち)は其方に申しつくる。さて其方への下知は、先づ此通りに致せ——凡て胡亂な奴原は捕縛致せ、又通行の者共は、誰彼の差別もなく、公爵殿下の御沙汰と申して一應引留め。

シ 留まれと申しても、若しや留まらぬ時は、如何圖らひませう。

ドック はて其時は打棄て勝手に通らせい。通らせたらば、早速一同を呼集め、無頼漢一人世話が脱けたと申して、御題目を唱へやれい。

ウア 留まれと申しても留まらぬ奴は、どうて公爵の臣民ではない。

ドック 如何にもさうぢや、どうて公爵の臣民ならぬ者は、何うあらうと構はぬ。——また其方達は、大道で聲を立てまいぞ、夜番の者が、うるさく饒舌り散らすは、中々用赦のなり兼ねぬものぢや。

シ 九とひ居眠を致さうとも、談話は致しますまい、夜番の役目は心得て居ります。

ドック ハテ其方はけなものぢや、道がは老功沈着たもの、實に居眠は人の妨害にならぬ、たゞ銀(夜番の必ず)を盗まれぬ用心せい。——又茶屋小屋を見廻つて、泥酔れた者があつたら、早う寢せて遣れ。

シ 乍去若し寢ぬと申したら如何致しませう。

ドック はて其時は醒める迄抛つて置け、若し逆拗に其方に喰つて懸つたなら、これは人違ひを致したと申して置け。

シ 心得ました。

ドック 若し又盜賊に出遇うたなら、其方の役目柄、これはうるんな奴ぢやと嫌疑を懸くるも宜い、乍去かやうな者には、成るべく拘らはぬ方が、

其方の名譽なぶらの爲めておじやるぞ。

シ 然らば盜賊と見定めたなら、手出は致さぬと致しませうか。

ドッ それは其方の役目故、手出致すも勝手なれど、汚れた物を攫めば、わが手も汚れるてあらう。其方の身に取、穩便な仕打と申せば、先づ盜賊を捕へたなら、盜賊の本性を現させて、其方の目を盗み、脱ぬけ出させるが一の手であらうぞ。

ウ ア イヤ御同役、貴殿は下役に對し、慈悲深いとの是沙沙でムるがげに尤てムる。

ドッ 眞實某は、犬なりとも某の指圖では殺させませぬ。ましてそれく取柄のある人間を何う致さうぞ。

ウ ア まった其方は、夜中に乳呑兒の泣く聲を聞いたなら、乳母を呼起して、

泣き止めさせるが宜いぞ。

シ 乍去、若し乳母奴が寢汚いびたなうて、指圖を聴きませぬ時は何と致しませうぞ。

ドッ ハテ其時は、其まゝ棄て、行くまでの事、泣く兒の聲で、何時かは目を覺すてあらう。子羊こひつの泣聲が、耳に入らぬ母羊ははひつに、小牛こひしの鳴聲が聞ゆるもので。

ウ ア 御尤てムる。

ドッ 身共より申附くる義は先づ是だけ。——番頭たる其方は、取りも直さず公爵の御代官故、若し夜分公爵に御出遇申すとも、同じ様に引留め、制規の訊問苦しうないぞ。

ウ ア イヤ、それは成りますまい。

ドッゲ イヤ苦しうない、此儀に就ては、上の御沙汰を存じ居る者となら、相
 手の一兩に某が五兩賭けても主張らう。尤も公爵の御意に叶はぬ時
 は、止めるが宜うムらう。ハテ夜番と申すは、成るべく人に不快の念を
 致させてはなりませぬ。然るに當人の意に逆らひ、留立致すは、コリヤ
 人の機嫌を損ねると申すもの。

ヴァ 如何にも某も左様に存じまする。

ドッゲ ハハ、判明りましたか、さて其方達、さらばこれで。若し何を容易な
 らぬ大事とあらば何時でも身共を呼び起せ、また役目に關はる儀に
 就ては、我他の差別なく、滅多な事は口外すまい。さらばさらば——い
 ざ参らう御同役。

シイ 御指圖の儀は確と心得ました。此上は今より丑滿の刻迄、寺の門前

の腰掛に夜番を張り、さて一同罷り歸るでムりませう。

ドッゲ イヤ待て、も一言申付くる事がある。外でもないが、今夜は、レオナト
 殿が館の近處で番をせい、明日祝言を致すとあつて、今夜は甚う取込む
 様子ぢや。さらば随分氣を付け、頼んだぞよ。

とドッゲ、ペリー及びヴァーサス退場

ホナラ (奥に) ヤイ、コンラード——

シー コレ静かに、身動ますまら。

ホラ (奥に) コンラード殿——

と云ひながらホナラ、ペリー及びコンラード登場

コン 此處に居る汝の肱の直ぐ後に居るわ。

ホリ お、道理で肱が痒かつた、虱でも附いて來るかと思つた。

コン ヤイ記憶おぼえて居れ、此返報は後あとて爲なる先まづ、先刻さきの話を續けて聞かせい。

ホラ そんなら此家の軒下へ、かう二人で立たう。ちらく、雨が降ふつて来た、飲酒家のり冥利みか、洗せんひざらひぶち撤ひけて聞かさう。

シ | (旁) 何ぞ善よからぬ隠謀かくまと見えた。乍去先まづ、一同ぢつとして聞いて居やれ。

ホラ ナ、夫故にこそドン・ジョンの君から、まんまと千兩の金をせしめた、コン 悪事といふは、其様に相場あはれのよいものか。

ホラ いやさ、それより悪人といふは、其様に金のあるものかと何故問なはぬ。ハテ金持の悪黨が、貧乏な悪黨に用を頼めば、貧乏な悪黨は勝手な相場あはれを立てる分の事。

コン どうもこれは驚おどろき入いった。

ホラ それは汝おまえがまだ青い證據だ。ハテ下着したぎは何どうぢや、帽子ぼうしは何どう、外套がまは何どうと、流行はやりを知るばかりが男の能あたではない。

コン げにそれは表被うはべの事ぢや。

ホラ イヤ流行の事を申した。

コン げに流行は流行ぢや。

ホラ 馬鹿は馬鹿ぢやと云ひたい。乍去此流行といふものは、何と間の抜けた癖者くせものではないか。

シ | (旁) フム身共は其癖者くせもの、(遠へしならむ) を承知致す。凡そ此七年が間、盜賊ぬすめを働はたらき居るが、遂ついにぞ捕はれもせず、立派な服装みなりを致して徘徊致す。身共は彼奴の名を忘れはせぬ。

ホラ ハテ何處ぞに人聲がするやうではないか、

コン イヤあれは屋根の風信の鳴る音ぢや、

ホラ いや流行と申すは、何と間の抜けた癖者ではないか、凡そ十四五から三十四五迄の人間の血を、ぐらくぐくと逆せ上らせ、或時は煤じみた昔繪に有勝な埃及のフワラオが率ゐた、雑兵の様な服装を爲せ、或時は古寺の窓玻璃に書てある、ベル神(低作聖經中)が遣はしめの僧侶といふ扮装をさせ、又或時は汚れて虫の喰った帷帳の繪の髭を剃ったハークレス(有名な番)といふ風俗で、手に持つ棍棒程の長い巾着を着けさせる。

コン 如何にも其通りく。そして流行といふ癖者は、人間よりも、餘程衣服を早く着古すものぢや。乍去汝も肝腎の語が外れて、流行の御講義

とは矢張り流行で逆上せたさうな。

ホラ イヤさういふ次第でもない、先づ聞きやれ、今夜はな、此某がヘロー姫の腰元マーガレットを、假にヘローと名乗らせて、逢引を致したと思へ、マーガレットのヘローは、ヘロー姫の寢室の窓から、首を出して某を見返り、繰返し、別れを惜んだしほらしさ——いやこれでは話し様が悪い、初めに云うて置くことがある、と申すは、公爵様とクラウヂヲ殿、それに某が主人のドン・ジョン様、此三人が庭先へ出て、遠くの方から、此逢引の様子を見て居た事ぢや、素より公爵様とクラウヂヲ殿へは、ドン・ジョン様が前以て、形もない讒訴を申して置いた、

コン して御兩人は、マーガレットをヘロー姫の積りて居るのぢやな、

ホラ いかにも、公爵様とクラウヂヲ殿は其積りぢや、乍去某が御主人様

は、マーガレットといふ事を御存じは云はてもの事。されば彼のクラウ
 デヲ殿は、一つには前以て心を動かされて居た讒訴の爲め、又一つに
 は紛らほしい閑夜の爲め、別しては某が巧みな仕打で、ドン・ジョン様
 の讒訴を生かして退けた爲め、眞實まことと思つて狂氣の様になつて戻ら
 れたが、明日は約束の通り、何げない様子で寺へ行き、婚儀の席に連れた
 上、夜前見聞の次第を述べ立て、満座の中で散々に耻はぢしめ、元の處女むすめで
 還すと云はれた、

シー ヤア停れ、公爵殿下の御意でムる。

トオー 早や〜お目附を御起し申せ、此共和國に例たともない、險呑けんこん至極な大
 陰謀を抑へたぞよ。

レイ して先刻さういふ噂を致した癖者も、慥かに此中に居る様子、身共はよく承

知致す、片小髻を結んで下げたが其奴ぢや〜(左の小髻を結びて下
 げに流行せし理髪法なりしとぞ、而して之を結ぶに愛人より貰ひ受けた
 るリボンを利用するの習慣ありしが故に之を戀髪ラブヘアと云ひしといふ)

コン コレ夜番の衆〜

トオー 然らば屹度こなた貴殿指すが其癖者の見別方みわかたを承るであらう。

コン コレ夜番の衆〜

シー 黙らっしゃれ、サア〜おとなしく此方こつちへ来い。

とコンラード及びボラチナ捕へらる

ボラ さて〜、かやうに無造作に制へられるとは、我ながら呆れた代物
 だ。

コン 御詮議中の代物ぢやわ〜来い〜引いて行く。

と一同退場

四場——レオナト家館の一室

ヘロー、マーガレット及びウルスラ登場

ヘロ コレ、ウルスラ、ビートリース様に、もう御目覺めなされて、御起き遊ばせと申して來や。

ウル 畏まりました。

ヘロ そして此處へ御出なされるやうに申上ぎや。

ウル 心得ました。

とウルスラ退場

マー 私は其御襟よりも彼方の方が御宜しいやうに存じます。

ヘロ イヤ妾は此襟にするわいな。

マー どうやらそれは御似合申しますまい、ビードリース様も屹度さう仰せられます。

ヘロ ビードリース様は話の外、其方とても同様ぢや、妾は此襟の外は厭ぢやわいな。

スー それならば御遊は、もう少し毛色が鶯色なら、御新調のが御室内では一番御似合遊ばしませう、御打衣はほんに上々品、私はミランの公府夫人が御召用の、御打衣も拜見致しましたが、

ヘロ それは結構な品ぢやといふ評判ぢやな。

マー 去りながら、貴嬢様のと比べては、ほんの御家内用でムります——金糸の入った織物へ、刻缺をつけて、銀の笹縁を取り、袖は上下とも眞珠を繡ひ込み裾へはぐるりと背箱を置いた御好み、ほんに形式の美し

い華奢で上品で高尚な所は貴嬢の御打衣の方が十層倍もお宜しう
ムります。

ヘロ それにつけても何卒それが着られるやうにも少し氣力が欲しい
ものぢやが何とやら胸が壓しつけられるやうに重うてくならぬ
わいの。

スー 今に殿御の重みでもと重うなりますぞへ。

ヘロ え、汚らはしい嗜みやいの。

マ一 ハテさて何を嗜みませう、正直を申上げるに何嗜み、祝言と申すは
乞食奴が致しても貴いものでムります。まして御婢様は祝言せぬ中
から、貴い御方ではムりませぬか、あゝ聞えた、私が只だ殿御の重みと
申したが、御氣に觸りましたか。御婢様の重みと申せばよいのてムり

ませう、猥らな意で申したならいざ知らず、正直の處を申すに、誰に遠
慮もない筈、御婢様故重くなると申すに何れ何處が汚らはしうムリ
ます、暗れた夫婦の中ならば、其様な事はムりませぬ、尤もこれが親の
許さぬ淫奔ならば、ほんに重いどころか、輕々しさの骨頂でムりませ
う、虚言と思召さば、ビートリース様に御聞きなされませ、おゝ丁度此
處へ御出なされました。

ビートリース登場

ヘロ ビートリース様、お早うムります。

ビー ヘロー様、お早うムります。

ヘロ 何うなされました、どうやら御氣分でも悪さうに、御聲の調子が御
變りなされた。

ピ 調子外れの此妾、此外の調子は出ぬのでムリませう。それはさうと
ヘロー様、最早五時でムリです。御仕度の刻限でムリですぞへ。――あ
ゝ妾はどうやら気分がすぐれませぬ。――あゝさてく。

マ 其御嘆息は御聲様でも欲しいのではムリませぬか。

ピ それどころか胸が痛い。

マ ホ、あれでもお變りがないならば、此世の中は眞暗々々頼るべき
星もないと申すもの。(マは心中にてピトリスに施したる偽計の成
めかすなり)

ピ そりや何を云やるのぢやえ。

マ 何でもムリませぬ。但し神様は、何の様な御方にも、何時かは意中
の人を御遣はし下さるものでムリです。

ヘロ 何とピトリス様、此手袋は伯爵(アラウ)から御遣はしの品物、好
い香がするではムリませぬか。

ピ 昨夜から風氣で鼻がつまり、少しも香氣は分りませぬ。

ヘロ ハテ御聲様もないのに、夜分御冷えなさるとは、飛んだ御風を召し
ましたな。

ピ さてく、其方は、何時から翳間(かすみ)になりやったぞ。

マ 貴嬢が御廢めなされてからでムリですが、如何でムリです。似合ま
してムリませう。

ピ 但し餘り目立たない頭の上へでも看板を出すが宜い。――え、
分が悪うてならぬわいの。

マ それならば彼のベチヂク草(一種の薬草の名、ベチヂクと同名故雙
方の意味を含ませしは云ふ迄もなし)

の絞汁を御求めなされて、御胸に御つけなされては如何でムリます、御氣分の悪いには、彼に上越す物はムリませぬ。

ヘロ おゝそれでこそ急處に鍼。

ピ― ベチヂク草、何故殊更ベチヂク草を、おゝ其ベチヂク草と申すには、何を裏に意味があるのぢやな。

マ― 裏の意味などは、思ひも寄らぬ事てムリます。私は只だ彼の藥草のベチヂク草を申したのでムリます。貴嬢は大方私が、貴嬢を戀病ぢやなど、思つて居ると思召すのでムリませうが、私ぢやとて好きな事ばかりは考へませぬ。又勝手な事を考へて面白くも思ひませぬ。いかに氣が遠くなるまで考へ抜けばとて、貴嬢の様な御方様が、戀病に罹つた、罹からしやらう、罹かる事もあらうなどは、何う致しても思は

れませぬ。尤も男ではベチヂク様が、貴嬢の御仲間てムりましたが、今は御宗旨替、女房は持たぬ〜と口癖に仰せられましたのが、食はず嫌ひの御本性で、一味嘗めた只今では、至つて大食なされます。貴嬢とても其様に何う御變りなされうか、知れたものでもムリませぬ。貴嬢の御目ぢやとて、外の女子と別段變りのない上は、何時かは御目に附く者もないとばかりは申されますまい。

ピ― ハテよう驅ける舌ではある。

マ― これでも陥外しはムリませぬ。

ウルスラ登場

ウル さア〜早う彼方(化粧室)へ〜。公爵様、伯爵様、ベチヂク様にドン
ジョン様、其外此市の歴々が、御寺へ御伴をなされう爲め、最早御出な

されました。

ヘロ そんならピートリース様、マーガレット、ウルスラも此方へ来て、着替の手傳を致してたもれ。

と一同退場

第五場——レオナト家館内他の一室

レオナト、ドック、ベリ、ヴァーデス登場

レオ 某に用談とは何事ぢやな。

ドック 私は御前様御身の上に関はる儀で、少々御話し申上げたらうりまする。

レオ それならば何卒手短かに願ひたい見らるゝ通り、いかう取込んで

居る事故。

ドック いかにも左様でムりまする。——

ヴァ げにくく左様でムりまする。

レオ さて何事ぢやな。

ドック ヴァーデス殿には、少々談話が廻り遠い、御覽の通りの老人でムります。尤も御心は確かなものも、少々は惹けても宜からうと思はれる程で、乍去何奇も正直な事は、額の皺に現れた通りでムります(恐ろしい程に)の迷信よりかく云ひしならむと)

ヴァ げに難有い事に私は、世にある不正直な老人共に比べては、誰にも劣らず正直でムりまする。

ドック イヤ其御比較は恐縮致す。詞少なになされヴァーデス老。

レオ 御身達は少々詞が悠長過ぎる。

ドック 御前は其様に御意なされますが、私共は貧乏な公爵殿下に召使はれまする役人でムリます悠長など、御賞に預り恐入ります、尤も他人は知らず、私に若し帝王程の悠長さがムりましたなら、私は心から、悉皆御前に差上げて、宜しい存寄でムリまするに。

レオ 御身が悠長さを、悉皆某に呉れうとは恐縮致すな。

ドック よしやこれより數厨倍多い額でムリませうと、決して惜しいとは存じませぬ、此市中で萬民よりやんやと申される御前様、及ばずながら私も、それを聞く度に喜ばしう存じて居ります。

ウア 私とても其通りでムリまする。

レオ 先づく用談と申すを承ると致さう。

ウア 恐れながら申し上げます、外でもムリませぬ、昨夜夜番の砌此メッシナの市中にも、又とない程の悪人を、二人召捕りましてムリまする。

ドック いや結構な老人ぢや、御前、此老人が獨りて述べ立てまする、諺にも齡が増せば、知恵が減ると申しますが、げに一考の價値はムリませう。——お、ウアーヂス老、よろこそ申し上げられた——げに神は善人にまします故、悪いやうには遊ばされぬ、二人で一匹の馬に乗れば、一人は後に居ねばなりません。——正直な老人ではある、ハテ此様な正直者は古來嘗てムリますまい、乍去神様は難有うムリまする。人間は凡て一様には出来て居りませぬ。——さても結構な同役殿。

レオ げに何うやら、此老人は、御身には及びもつかぬ様に見える。

ドック これも皆神の御授け事でムリまする。

レオ いや身共は先づ参らねばならぬ。

ドック 先づく一言御聞下され夜番の者共が二人の怪しき者を捕へました。今朝御前の御目通りに於て二應御吟味を願ひたうします。

レオ 其吟味は御身達に委せる程に、某には後に報告せて呉りやれ。推量の通り某は、只今ちとの猶豫もない。

ドック 然らばそれでも宜しうします。

レオ 先づく何もなければ、一杯飲んで、それからゆくり歸つて呉りやれ、さらば。

使者登場

使 申し上げます、御儀式を御始め遊ばすに就き、御前の御出を一同御待ちなされて候ります。

レオ 只今参る、さよく。

とレオナト、及び使者退場

ドック 然らば御同役、フランシス、シーコールの許へ起き、筆墨持参て牢屋迄出頭あるやう、貴殿御話しなされて下され。只今より彼の悪人共を吟味致すてらう。

ウァ いかにもぬかりがあつてはなりません。

ドック 決してぬかる事ではない。彼奴等を行詰らす方略は、これ此處に
ムる(を己が罪)ともかくも貴殿は吟味の模様を記さする爲め、彼の文
筆に達者なシーコールを御連れなされて、牢屋へ御出て下されい。

と一同退場

第四幕

第一場 寺院内 (結婚の式)

ドン・スドロー、ドン・ジョン、レオナト、フランシス僧正、クラウヤナ、
ベチヤック、ヘロー、ピートリス及び侍者等登場

レオ フランシス僧正に申し上げます。何卒今日は、只だ型許りの式を挙げ、
新卡新婦への御教誡は、後日を期して御申聞け下さるやう願はしう
ムりまする。

クラ (クラに) さて伯爵には、これなる婦人と縁組を致されうとな (と定例
の文句)

ふん

クラ 否々



クラッ 伯爵にこそはなれぬ縁組を致さるやう願はしう
クラッ 否々

レオ 縁組を願ひ出でましたは伯爵縁組を致させるは貴僧の役目てム
る。

フラ (ヘロに) 又貴嬢には、これなる伯爵への縁組を願はるゝとな。

ヘロ 其通りてムります。

フラ 然らば兩人の中何方なりとも、何ぞ此縁組に、内心故障ありと思は
るゝ事がムらば、包まず此場にて御懺悔あれ(式とも常例の儀)

クラ ヘロー殿、何ぞムるか。

ヘロ 何もムりませぬ。

フラ 然らば伯爵には。

レオ 何がムりませう——某が御保證申す。

クラ おゝ人間と申す者は、何も知らずに、よう大膽な事を致し致せるも

のでゐる。日常の事亦其通りてゐる。

ベネ ハテけしからぬ其御述懐。

クラ 僧正、貴僧は暫く御控へ下され。――申し舅殿、憚りながら貴殿には、御娘御なる此婦人を、心よりして某に下されうとてゐるか。

レオ いかにも當初造物主が、某に下し給はりしと同様に、心よりして進ませます。

クラ さて、此様な、貴とい大事な下され物を頂戴致し、其御返禮には、何を差上げたなら、御厚志に酬ゆる事が出来ませう。

ペド 御娘御を御返却致すより外、所詮返禮の致し様は、ムるまい。

クラ イヤ、忝うゐる公爵、よろこそ御返禮の致し方を御教へ下された。――いざレオナト殿、娘御を御持ち還り下され。ハテ此様な腐つた密柑

は、苟にも知人へなど御願ちあるな。娘御にはほんの看板見懸倒し、御覽なされ、彼の生處女らしい耻らひやう。いかに狡智にたければとて、彼の様にも殊勝らしう、誠しやかに見せ懸けらるゝもので、ムるか。彼の頬に潮した、紅は、無垢を表す證據とより外見をませぬ。彼の様子を御覽ある方々は、彼のしほらしい素振から、手入らず處女と御請合もなし兼ねますまい。去りながら、彼女は處女では、ムらぬ、最早一人寝ならぬ、衾の暖味を知り居ります。彼の頬は初心娘の初々しさではなうて、犯し、罪を耻づる故の潮紅でゐる。

レオ 伯爵、それは如何なる思召でゐる。

クラ 此祝言は致すまい、いやさ證據を制へた淫婦へ、某が清い魂魄を結付けまいとの事でゐる。